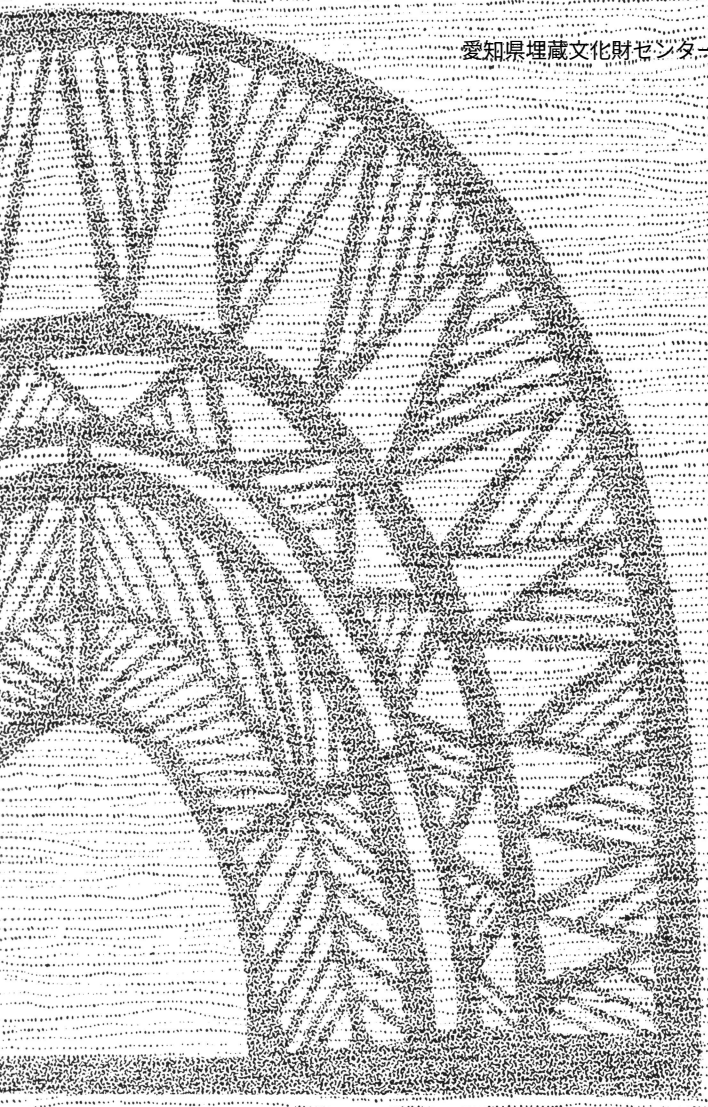
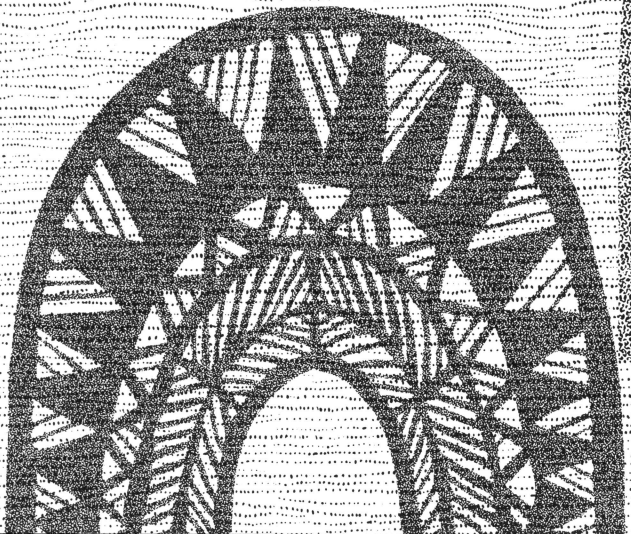
遺跡調査の概要







調査の理由と工程

1．発掘調査

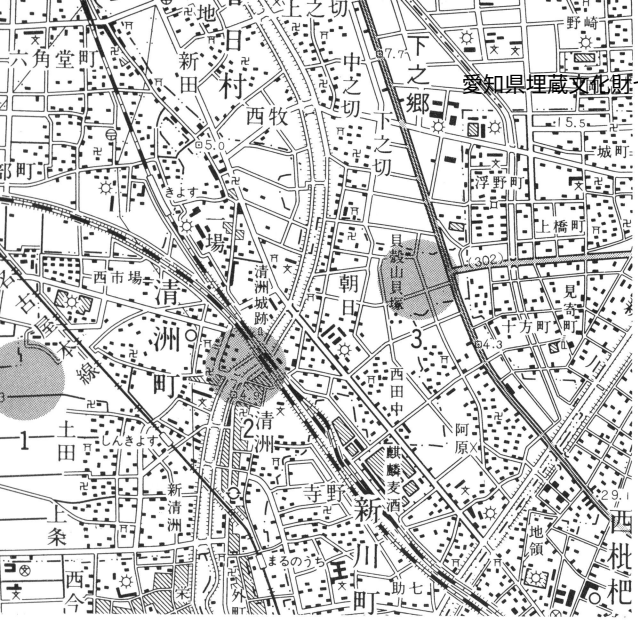
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(m²)		調査の期間	調査担当者
建設省	名古屋環状	松河戸遺跡	A	1,228	89.4~89.6	神谷・岡本
日本道路公団	2号線		B	1,502	89.4~89.6	神谷・後藤
			C	3,602	89.11~90.3	神谷・真鍋・後藤
			D	3,734	89.6~89.10	神谷・真鍋・後藤
			E	4,000	89.11~90.3	神谷・岡本
			F	4,000	89.6~89.10	神谷・岡本
			G	1,906	89.10~90.1	神谷・樋上
			H	1,135	89.10~90.1	神谷・樋上
		(21,603m²)	I	496	89.4~89.7	神谷・松原
		勝川遺跡	A	237	89.6~89.8	神谷・松原
			B	69	89.11~89.11	神谷・松原
		(1,236m²)	C	930	89.11~90.3	神谷・松原
		池下古墳	A・B	1,379	89.4~89.11	神谷・真鍋・樋上
		朝日遺跡	A	676	89.4~89.7	鈴木・加藤
			B	734	89.4~89.7	梅本・石黒・小塚
			C	440	89.4~89.7	梅本・石黒・小塚
			D	53	89.7~89.8	石黒・小塚
	(26,218m²)	(2,000m²)	E	97	89.7~89.8	石黒・小塚
建設省	国道23号	岡島遺跡	A	3,750	89.4~89.8	安井・北村・川井
	バイパス	(7,500m²)	B	3,750	89.10~90.1	安井・川井
日本道路公団	東海北陸自動車道	光明寺A	試掘	30	90.1	赤塚・伊藤
住宅都市整備公団	水野特定土地区画整理	小田妻遺跡	A・B	2,000	89.4~89.10	日比・城ヶ谷・山口
愛知県土木部	東三河環状線	麻生田大橋遺跡	A・B	1,100	89.10~89.12	福岡・山田・北村・川井・松田
(都市施設)		(2,900m²)	C	1,800	90.1~90.3	福岡・山田・北村・川井・松田
	新川・清洲線	清洲城下町遺跡		50	90.2	鈴木
	萩原多気線	岩倉城遺跡	A	610	89.11~90.2	山仲・服部・金子
			B	610	89.11~90.2	山仲・服部・金子
			C	590	89.5~89.7	山仲・服部・金子

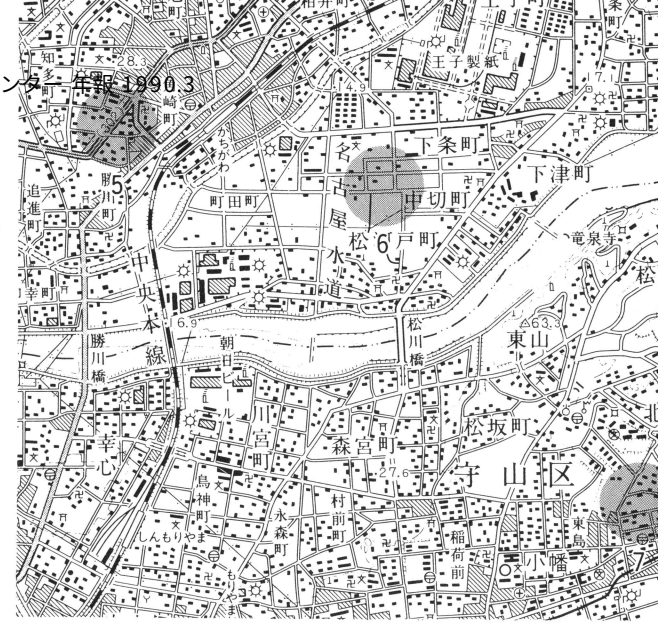
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
			D	675	89.4～89.4	山仲・服部・金子
			E	922	89.7～89.10	山仲・服部・金子
			F	923	89.10～89.11	山仲・服部・金子
		(5,240㎡)	G	910	90.2～90.3	山仲・服部・金子
(道路建設)	蒲郡碧南線	東光寺遺跡	A	2,500	89.4～89.6	福岡・山田・川井・酒井・松田
		(5,000㎡)	B	2,500	89.7～89.9	福岡・酒井・山口・伊藤
愛知県土木部	東三河環状線	森岡遺跡		1,000	89.8～89.10	安井・北村・川井
(道路建設)	中畑橋整備	清水遺跡	A	900	89.10～90.2	山田・酒井・山口
			B	600	90.2～90.3	酒井・山口
		(2,220㎡)	C	720	89.10～90.3	山田・酒井・山口
(河川課)	五条川改修	清洲城下町遺跡	A	750	90.1～90.2	日比・城ヶ谷
			B	2,050	89.8～90.1	小澤・小塚・加藤
			C	700	89.8～89.11	梅本・小塚
			D	1,300	90.1～90.3	鈴木・小塚
			E	1,300	89.9～90.2	梅本・加藤
(23,390㎡)		(6,980㎡)	F	880	90.2～90.3	小澤・加藤
県農地林務部	水質障害対策	上田遺跡	A·B·C	1,300	89.11～89.12	日比・城ヶ谷

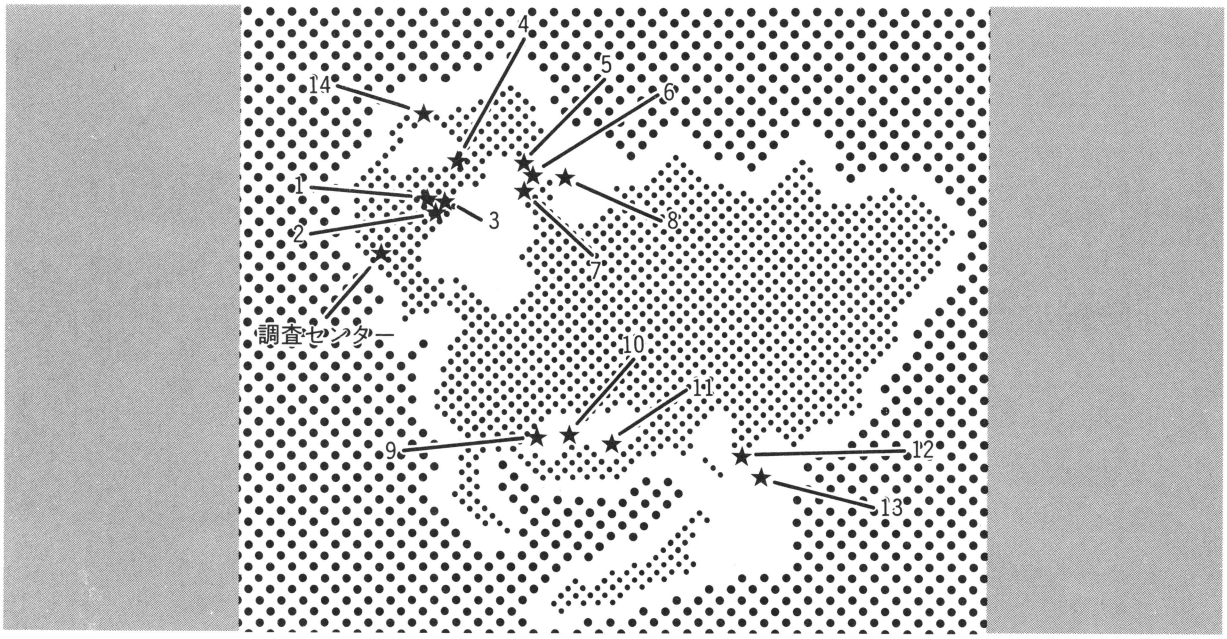
2．報告書

調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省 日本道路公団	名古屋環状2号線	大渕遺跡	10,464㎡	昭和58～昭和60年度
		阿弥陀寺遺跡	30,415㎡	昭和56～昭和61年度
		廻間遺跡	7,899㎡	昭和60～昭和61年度
		小田井・比良遺跡	2,334㎡	昭和62年度
建設省	国道23号バイパス	志貴野・小島遺跡	8,000㎡	昭和62～昭和63年度
建設省	合同庁舎建設	名古屋城三の丸遺跡	3,100㎡	昭和63年度
愛知県総務部	新図書館建設	名古屋城三の丸遺跡	7,600㎡	昭和63年度
愛知県土木部	勝川土地区画	勝川遺跡	5,779㎡	昭和59～昭和63年度
	蒲郡碧南線	岡島遺跡	6,900㎡	昭和61～昭和63年度
	東三河環状線	麻生田大橋遺跡	4,800㎡	昭和63～平成元年度
		森岡遺跡	1,000㎡	平成元年度
	新川清洲線	清洲城下町遺跡	7,710㎡	昭和62～平成元年度
	国道247号線	松崎遺跡	2,000㎡	昭和63年度

愛知県埋蔵文化財センター 年報 1990.3

















1．土田遺跡
2．清洲城下町遺跡
3．朝日遺跡
4．岩倉城遺跡
5．勝川遺跡
6．松河戸遺跡
7．池下古墳
8．小田妻古窯跡群
9．清水遺跡
10．岡島遺跡
11．東光寺遺跡
12．麻生田大橋遺跡
13．森岡遺跡
14．東海北陸自動車道関係試掘



朝日遺跡

調査の経過

本年度は朝日遺跡調査の最終年度である。調査区はＡ区・Ｂ区・Ｄ区で、面積2000㎡である。

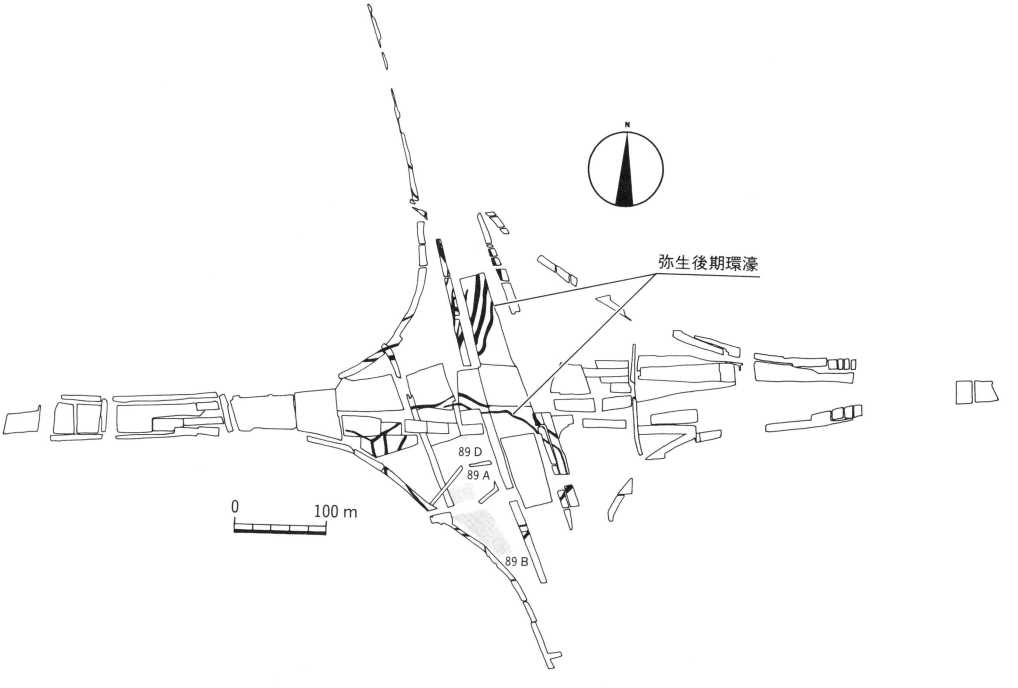
３調査区はいずれも南微高地の居住域に位置し、濃密な遺構・遺物の検出が推定された。調査成果はその予想を裏切ることなく、銅鐸を筆頭にして遺構・遺物に新たな事実を書き加えることになった。（石黒立人）

調査の概要

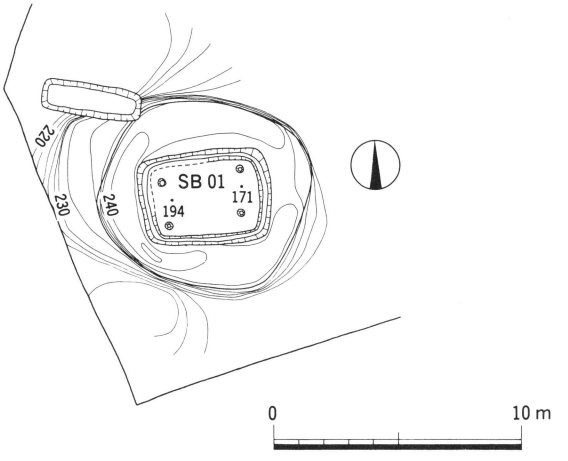
Ａ区

Ａ区は検見塚の南西に位置し、南居住域の中央部に当たる。基本層序は水田耕作土以下に灰色粘土、黒褐色砂質シルト、黄灰色シルトと堆積する。

黒褐色砂質シルト上面で、中世方形土坑７基、古墳時代前期の住居１軒などが検出された。このうち住居（ＳＢ01）は平面形が隅円長方形を呈し、周堤と考えられる高まりも良好な形で検出できた。昨年度調査された古墳時代の住居と合わせて、該期の集落の様子を



第１図　調査区位置図



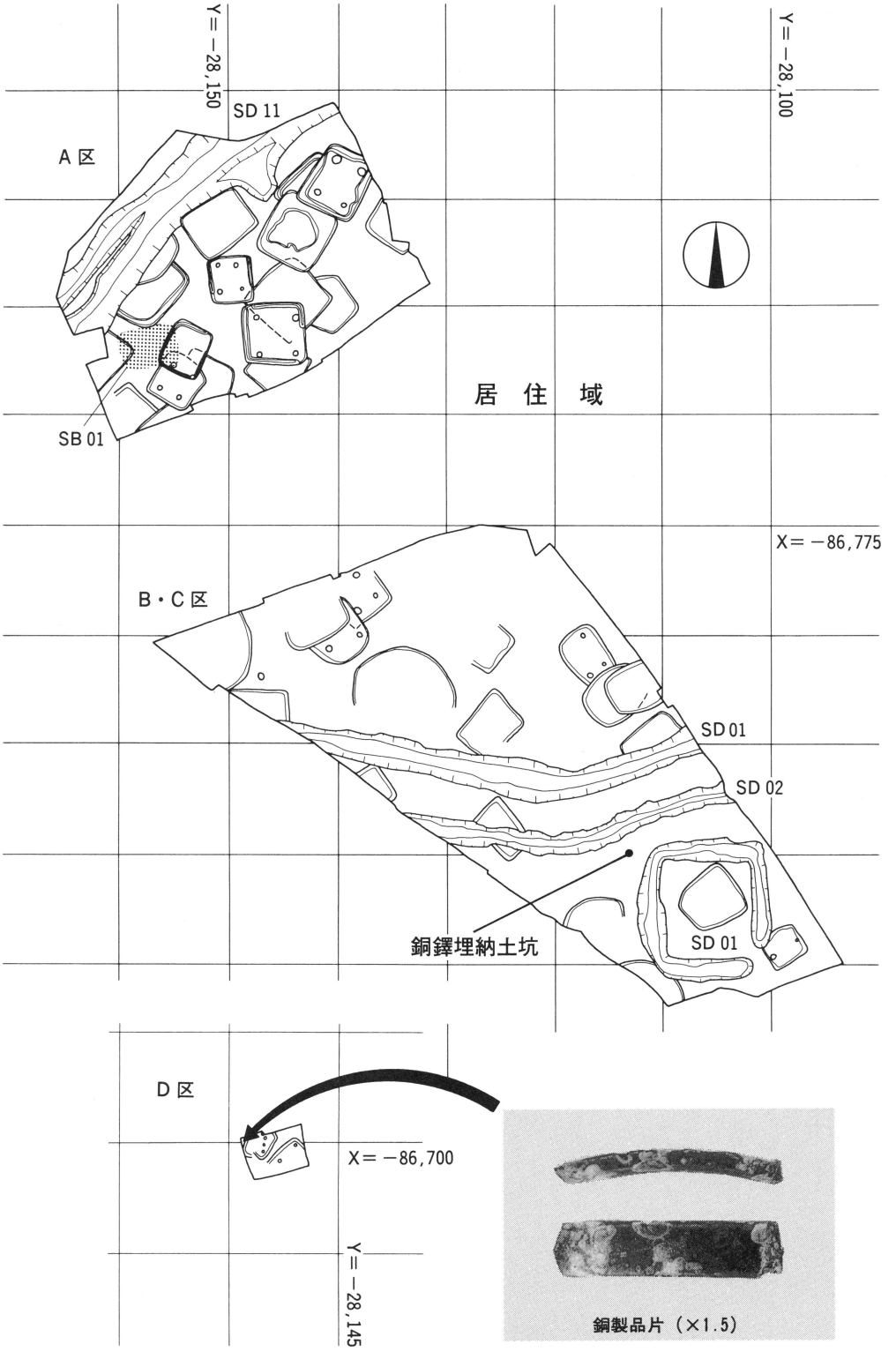
第２図　ＳＢ01プラン（等高線は２㎝単位）

知る手掛かりとなろう。

黒褐色砂質シルト層は弥生時代各期の遺構による攪乱が著しいため、検出の容易な黄灰色シルト層上面で遺構を検出した。調査区の北では弥生時代中期の溝（ＳＤ11）が検出され、埋没する過程で再掘削されていることが確認できた。その他の遺構としては住居、土坑などがあり、住居跡は円形住居が１軒ある他は、いずれも隅円方形の平面形を持つ住居である。このうち隅円方形住居は、周溝の幅が広いものと、幅が狭いものに分けられ、前者は弥生時代後期、後者は弥生時代中期に属するものであろう。土坑は一般に炭化物、焼土が層状に堆積しているが、土器を多量に出土した弥生時代中期の例もある。（鈴木正貴）



第３図　Ａ区全景



第 4 図　遺構配置図（ I /600）

B区

調査区は、南居住域の南部に位置し、上面では中世方形土坑、弥生後期の環濠・方形周溝墓・銅鐸埋納土坑、下面では多数の竪穴住居・土坑を検出した。

中世　中世方形土坑は、長軸を東西に向けたものが南北に向けたものに囲まれる配置をしていた。土坑の堆積状況は、土層セクションが斑状をなすもの、斑状部分が下部に限定され上部は灰色粘土の自然堆積がみられるもの、の二つに分れ、後者は長軸が南北方向にあるものに限定されている。土坑内部からの遺物の検出は、前者のうち長軸が東西方向にあるものからは灰釉系陶器と小皿のセットが、後者からは自然堆積層中からヒシの実が出土した。時期は14世紀後半である。

弥生後期　環濠２条と方形周溝墓１基、銅鐸および埋納土坑を検出した。環濠のＳＤ01は下層が山中期、上層は欠山期である。ＳＤ02は山中期であるから、本調査区に限定されるが、環濠は山中期２条欠山期１条ということになる。ＳＺ01は山中期の築造であるけれども、上層からは欠山期の土器が出土している。

銅鐸埋納土坑は、長軸がほぼ東西になる64×22cmの長楕円形プランで、断面はＵ字形を呈し深さは25cmを測るが、銅鐸そのものは底から５cmほど浮いて出土した。埋土はまわりの包含層とほとんど同じ漆黒色を呈する砂質シルトで、土坑底から５cmは銅鐸をうまくねかせるために詰めたものと考えられる。銅鐸の内部にも同様の土が詰められ、掘り込まれている包含層と同じ時期の土器片が含まれていた。　（石黒立人）

出土銅鐸について

（現状）　銅鐸の現状は、片側の鰭・Ａ面の身の一部・Ｂ面の身の１／４が欠損し、Ｂ面の右半分が内側に湾曲して数片に割れてしまっている。このうち鰭の欠損と身の湾曲は埋納後の掘削による打撃のため生じたものであるが、破面の観察によるとごく最近におこったものではないと考えられる。出土時には埋納坑内の埋土がほぼ全面に付着していたためクリーニングを行ったが、土の除去とともに文様や外壁が剝がれ落ちるため、クリーニング部分は最小限にとどめた。特に、Ａ面の左側とＢ面全体にわたっては、薄くではあるが埋土が強固に付着しており、今後さらに微細な除去作業が必要かと思われる。

（大きさ）　銅鐸の大きさは、鐸高46.3cm、身高33.2cm・幅（現状26.3cm）・底部長径（現状23.4cm）・底部短径16.2cm、鈕高13.1cm、鈕孔高3.5cm・幅3.8cm、舞長径（現状15.0cm）・短径11.6cm、鰭最下部幅2.9cmを測る。

（各部の特徴）　鈕は、外縁二区・菱環・内縁の四区に分かれる。外縁には相対する鋸歯文が配されており、それぞれ鋸歯文内には平行斜線が交互につけられている。ただし現状で確認できるもののうち、Ａ面の内向する鋸歯文帯の右から４番目と５番目の平行斜線は





▲上段　西から見た銅鐸埋納坑付近
▲下段　北から見た銅鐸埋納坑付近



▲クリーニング後の銅鐸



▲銅鐸検出直後（西から）





埋納坑を部分的に掘り下げた状態▶

同方向に走っている。また、A面の右最下位の外・内向の両鋸歯文は通常の半単位となっている。菱環は、外縁と内縁の境にやや厚い突線を配すことによって上下に区切られ、3本1単位の突線5組によって四分割されており、各区画ごとに異方向の綾杉文がなされている。

舞には2個の円形の舞孔があり、中央部に紐脚壁がみられる。

鰭は、上端4本・下端3本の突線によってくぎられ、双耳の飾耳が上端に付く。内側には内向の鋸歯文が施され、鋸歯文内には平行斜線が交互の方向につけられている。ただこの平行斜線も鈕の場合と同様に、最下位のものから上に4番目と5番目、8番目と9番目のものが同方向に施されている。

身は、2本の突線（最下位のものは3本）によって区切られた縦帯3帯、横帯3帯によって四区に分けられ、さらにその下に下辺横帯がある。縦・横帯には斜格子文、下辺横帯には異方向の平行斜線をもつ上向きの鋸歯文がつけられている。縦・横帯のうち、上下のものは横帯が縦帯を切っているが、中央のものは斜格子そのものには切り合いはなく、縦帯と横帯の交差する区画、それに隣接する上下左右の区画それぞれに斜格子の方向が異なっている。形持孔は、上位の区画に2ヶ所、下端に2ヶ所みられる。身には所々に鋳造時の湯廻りが悪くて生じたと思われる文様の不鮮明な部分が見られ、特に下位の1／3程には巣が多く発生している。

内面には、下位3㎝程のところに1条の内面突帯が巡り、真土かと思われる白い細粒の砂が部分的に固着していた。（宮腰健司）

弥生中期　円形竪穴住居跡2の他は隈円長方形住居を多数検出した。調査区南部で検出した住居の埋土は、A区の住居と異なり黄灰色シルトブロックの整地層は確認できなかった。居住域の中心部と外縁部では集落景観にも差があるようである。今後詳しく検討する必要がある。

D区

検見塚の北西に位置する調査区である。上面では検見塚の周溝、下面では住居跡の一部を検出した。弥生後期の包含層からは銅製品の破片が出土した。

（石黒立人）



B区　中世土坑と灰釉系陶器

清洲城下町遺跡

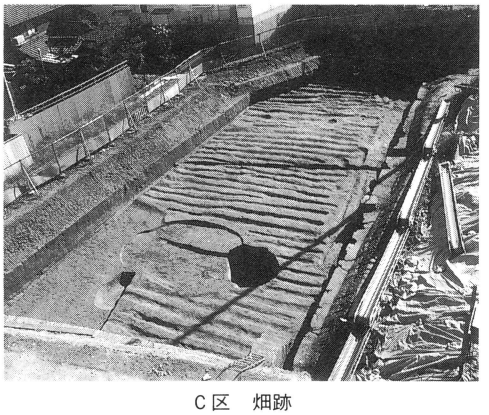
調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する五条川の中流域に形成された、標高５ｍ前後の自然堤防、およびその後背湿地上に展開する遺跡である。

発掘調査は名古屋環状２号線建設(昭和59年度～61年度)、五条川河川改修(昭和61年度～現在)、県道新川・清洲線拡幅（昭和62年度～現在）の各事業に伴って事前調査が行われている。これまでの調査では、主に、集落のあった古墳時代後期から平安時代前期の時期、寺院跡が想定される平安時代後期の時期、集落が点在した鎌倉時代から室町時代前期の時期、城下町が構成された室町時代後期から江戸時代初期の時期、宿場町の形成された江戸時代の時期が確認されている。このうち城下町が展開した時期は、「総構」の３重の堀が設定されるという画期をもって、更に区分できる。この城下町期の遺構群は、朝日西遺跡や廻間遺跡にも該当する時期の遺構群がみられることから、これらを含めた総体を「清須城下町」として把握していく必要がある。

本年度の発掘調査は、河川改修関係（Ａ～Ｆ区）面積計6980㎡、および県道新川・清洲線拡幅関係（Ｇ区）面積計50㎡である。本年度の調査地区では、Ｅ区で昨年度検出した「中堀」の南肩の検出が予想され、他の調査区はいづれもこの「中堀」の外側に当たる。

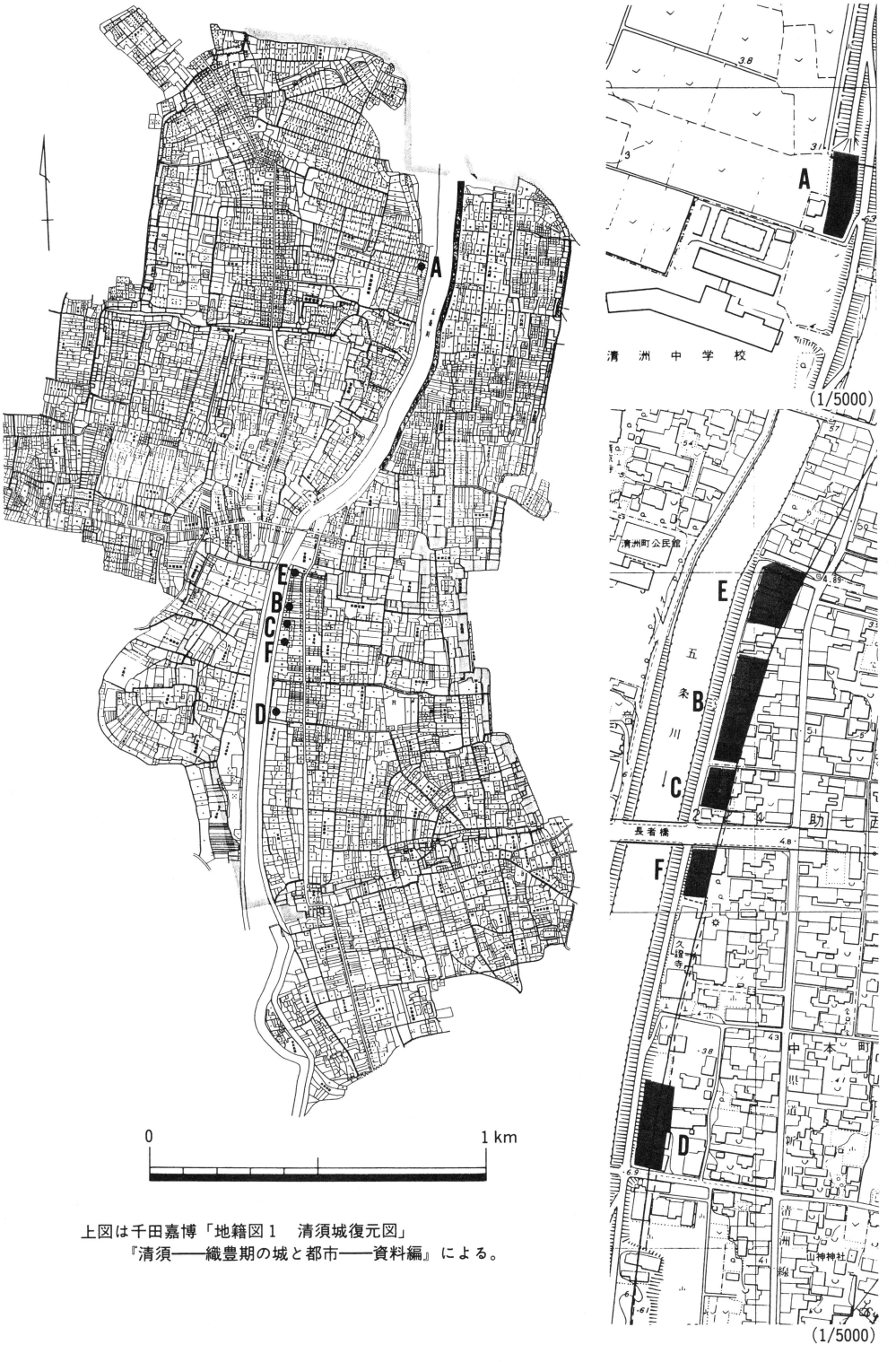
検出された遺構は城下町期と宿場町期の２時期に属するものであり、古代から中世の時期については良好な資料は得られなかった。特に、今回の調査では、中堀の南半部が検出され、西肩部分で石垣が発見されたことと、これまで明瞭な遺構が検出できなかった宿場町期前半（17～18世紀後半）の遺構群が検出できたことが特筆されよう。　（鈴木正貴）



Ｃ区　畑跡



Ｂ区　ＳＸ01出土状態



上図は千田嘉博「地籍図1　清須城復元図」
『清須――織豊期の城と都市――資料編』による。

第Ⅰ図　元年度調査区位置図

遺構

本年度の調査のうち、Ｂ・Ｃ・Ｅ区について調査区ごとに記述する。

Ｂ区　城下町期の主要な遺構としては溝・井戸・畝状遺構が検出された。溝にはＮ－20°－Ｅ前後を示すものとそれにほぼ直行する方向を示すものを検出した。この調査区では前者の方向を示すものが７条、後者のそれが２条検出された。井戸は確実に城下町期と推定できるものは３基、井戸枠は桶組みであった。畝状遺構は調査区の北東隅で検出され、それは前者の溝の方向に平行した状況であった。

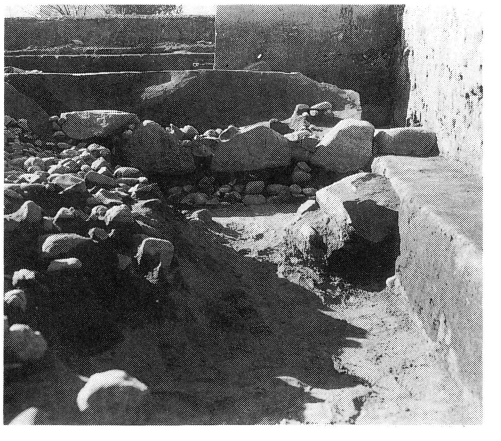
宿場町期の遺構としては、真北方向を示す溝、井戸、廃棄土坑等が検出された。この調査は町屋の裏側に当たる。井戸は３基検出され、井戸枠はこの時期も桶組みであった。また廃棄土坑と考えられるＳＸ01からは17世紀末から18世紀（宿場町期前半）にかけての遺物がまとまって多量に出土した。

Ｃ区　城下町期の遺構としては、溝１条、井戸３基、土坑２基が検出された。また開始時期については特定し得ないが、堆積状況から五条川瀬替え（1794年）以前の畝状遺構がほぼ調査区全体から検出された。

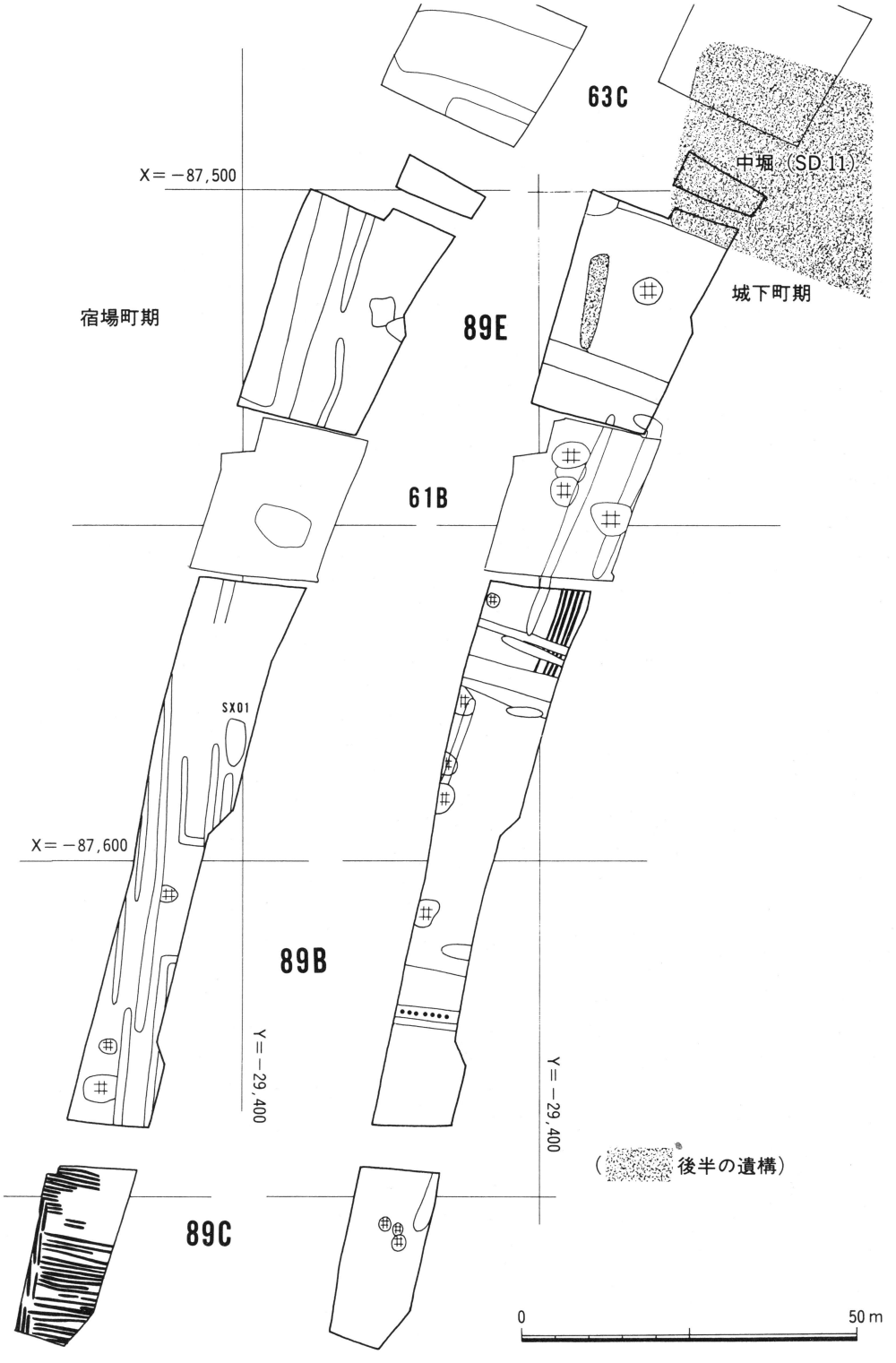
Ｅ区　城下町期の遺構としては、溝４条、井戸が検出された。この調査区では63Ｃ区で検出された中堀の南肩及び西肩部分が検出された（ＳＤ11)。この中堀の西肩部分で石垣が、南肩部分では拳大の円礫を敷き詰めた状況が確認された。石垣の検出は清洲城下町の調査では初めてのことである。また61Ｂ区で検出された城下町期前半の溝の続きも検出した。

宿場町期の遺構としては、Ｌ字状に屈曲する溝、廃棄土坑、排水施設、溝、土坑を検出した。この調査区で検出した溝は、Ｎ－15°－Ｅを示しており、Ｂ区のそれとは異なっている。廃棄土坑からは19世紀前半（宿場町期後半）の遺物が多量に出土した。（加藤とよ江）





Ｅ区　中堀（ＳＤ11）石垣出土状態

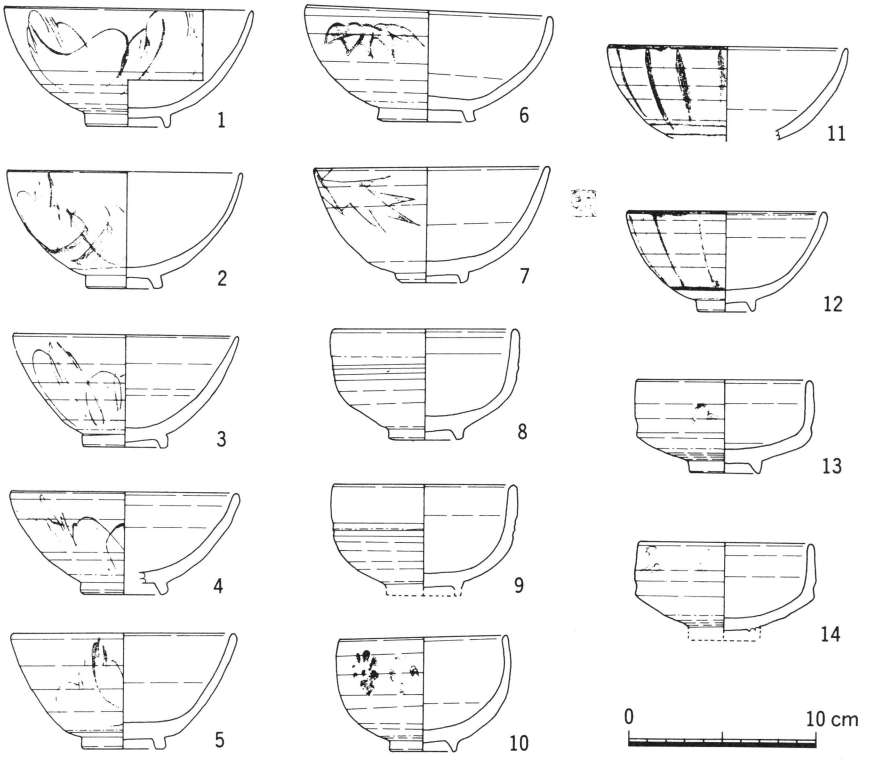


第２図　Ｂ・Ｃ・Ｅ区主要遺構の配置

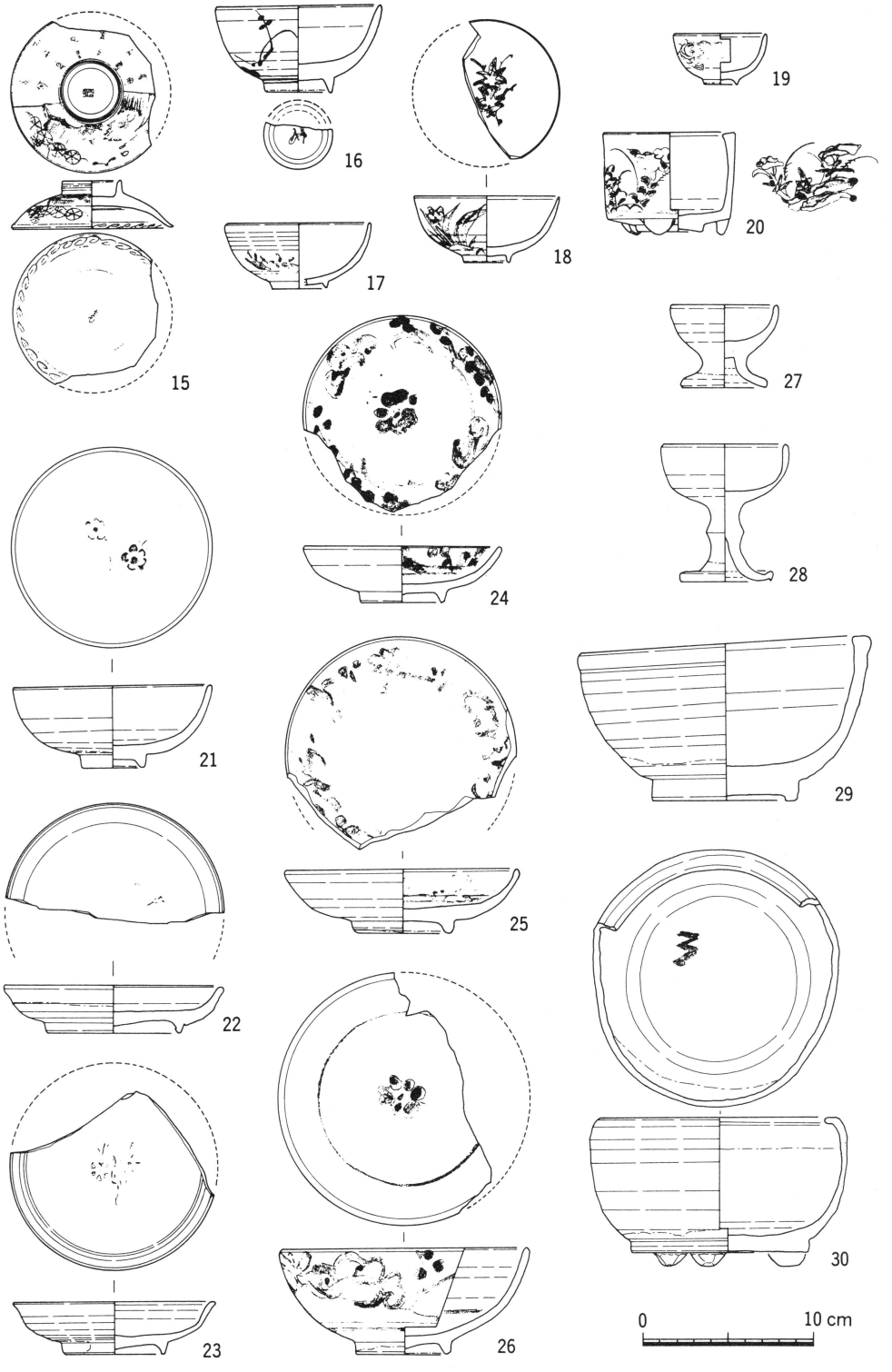
出土遺物

出土遺物の大半は瀬戸・美濃産の陶磁器類で、漆器の椀、箸、下駄、木像、柿経などの木製品類と古銭、煙管、小柄などの金属製品類、硯、砥石、石臼、五輪塔、宝篋印塔などの石製品類が出土している。これらの出土遺物は城下町期に属するものが大部分であるが、Ｂ・Ｅ区において宿場町期の良好な資料を得ることができた。このうちＢ区ＳＸ01（廃棄土坑）より出土の一括資料についての概略である。

Ｂ区ＳＸ01より多量の陶磁器が出土したが、その大半が瀬戸・美濃産の陶磁器である。他に数点であるが箸、漆椀の木製品や硯、砥石の石製品も出土している。第３図１～５は柳茶椀、６は呉須絵椀、７は貫入のある長石釉椀で上絵付が施される。８、９は腰錆椀、10は梅文椀、11・12は麦藁手椀、13・14は呉須絵小鉢である。第４図15～20は磁器製品で、17・19は上絵付が施されている。21は梅文小鉢、22は梅文皿、23は摺絵梅文皿、24・25は呉須絵皿、26は呉須絵鉢、27・28は灰釉仏飯具、29は小型鉢、30は小型火鉢である。その他徳利・瓶・灯明具・甕・摺鉢なども出土している。全体的な傾向を椀について見ると広東椀は出土しておらず、柳茶碗が多い。五条川瀬替普請（1794）による盛土下より検出していることから、それ以前の18世紀後半頃の宿場町前半期の遺物である。　（小澤一弘）



第３図　Ｂ区ＳＸ01出土遺物(1)



第４図　Ｂ区ＳＸ01出土遺物(2)

まとめ

1．平成元年度の調査では、城下町期～近世にかけての良好な遺構群を検出したが、それを遡る時期の遺構は全く確認し得ず、中世以前の遺構もみられた県道新川清洲線関係の調査とは、その様相を著しく異にした。

2．城下町前期の遺構としては、B・E・F区を中心に検出された溝群がある。この溝は、幅2～4m程度で、ほぼ同じ方向性（N－20°－E）を有しており、これまでの知見からすれば、武家屋敷地を囲む溝と考えられるものである。溝群は、C区北部を南限として、それ以南では、過年度の調査（61C・D区）でも全く検出されていないことから、前期段階の城下町の南限もこのあたりに設定することが可能となる。

また、B区北端では、畑地の「畝」遺構が検出された。これは、検出状況が比較的良好であったにもかかわらず、面的な広がりに欠けることから、広範囲に展開する畑地の一部ではなく、特定の屋敷地内に形成された小規模な耕作地であったと推定し得る。

3．城下町後期の遺構としては、「中堀」をあげることができる。堀の西端には、一辺数十cmの自然石により、「石垣」が組まれていたが、清洲城下町では、これまでの調査でみる限り、中堀、外堀共、石垣が組まれていた形跡は全くなく、何故、この部分にのみ、「石垣」が必要であったか、今後の課題といえる。

中堀以外の遺構としては、B区を中心に、小規模の溝群や井戸等の検出例が多かった。中堀の外（南）側には、「短冊型」の地割を有する町屋群が形成されていたものと思われる。

4．近世の遺構としては、B区・E区に展開する溝群がある。この溝群のうちには、L字状に屈曲するものもあり、また遺物量も比較的多かったことから、屋敷地を巡るものと考えられるが、それにより区画される空間は、比較的大きなものが想定でき、一般的な町屋地とは考えられない。

一方、C区では、ほぼ全面に「畝」遺構を確認することができた。これは、B区で検出された様な小規模なものではなく、広範囲に広がる畑地の一部であったと推定し得る。

また、畝遺構は、その直上より、現五条川の方向から連続的に搬入されたと考えられる厚さ1.5m以上の盛土により覆われていたが、この地業は、寛政6年（1794）の五条川瀬替普請によるものと考えられる。

5．今年度の調査区においても、各所で、地震による「噴砂」の痕跡をみとめることができたが、特にC区においては、幅5～15cm程で、N－35°－Eの方向性をとるものを何条か、確認することができた。この噴砂は、城下町前期の遺構埋土を突きぬけ、畝遺構により上部を削平されていることからその発生年代は16C後半以降1794年頃までの間に限定し得るものであり、天正13年（1586）の天正地震のものである可能性が極めて高いといえる。

6．今回の調査の結果、これまで漠然と「宿場町期」と考えてきた「清須越」以降の時期について、多くの知見を得ることができた。具体的には、五条川東岸では、寛政年間の五条川改修に伴い、かなりの量の搬土を伴う整地が実施されていること、また盛土により埋没した畝遺構、一括性の強いと考えられる廃棄土坑（B－SX01）が存在すること、あるいは、「中堀」の一部が、清須越以降も、18C前半頃までは、現在の「美濃街道」のあたりまで、沼沢地として存在していたであろうこと、などである。

したがって、この地点についていえば、18C末頃、美濃街道の径路の変更をも含めた、大規模な土地利用の変更が行なわれた可能性が高く、恐らく、89E、89B、61B区などではこれを契機とし、街道に面した町並みから、町裏へと変化したものと思われる。また、遺物からみても、この時期以降、地元産の磁器が出現し、61A、61B区等にみられるように、出土量自体も急増の傾向をみせている。

宿場町清洲は、少なくとも五条川東岸については、18C末を画期として、町並み成立期から成熟期へと大きく変貌していったものと思われる。　（梅本　博志）



E区全景（城下町期）

土田（つちだ）遺跡

調査の概要

土田遺跡は五条川下流域の自然堤防帯に展開する古墳時代から中世にかけての遺跡である。すでに昭和56年度から61年度にかけて名古屋環状２号線建設に伴い発掘調査が行われている。今回の調査は水質障害対策事業にともなうもので昭和56年度に調査された地区の延長部分に当たる。調査区はほぼ南北に環状２号線をはさんで幅約3.5M、長さ約270Mにわたって設定された。

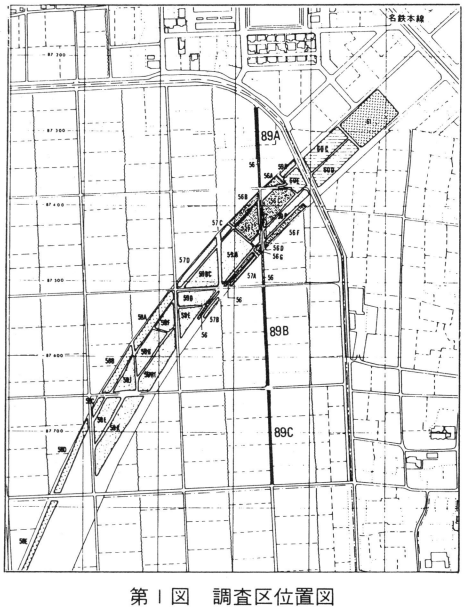
Ａ区　道路及び水路による攪乱のため遺構の残存は悪かったが、南北に走る中世の溝や土坑・ピットがいくつか見つかった。遺物は青磁、灰釉系陶器、小皿、常滑甕などである。

Ｂ区　遺構の残りが比較的よく、中世の井戸５基、東西に走る溝十数条、土坑、ピット及び古墳時代初期の土坑が検出された。中世の井戸は曲物が埋められ、なかにはＳＥ01のように木枠がはめられているものもあった。溝のなかからは灰釉系陶器、小皿、常滑大甕、土師皿などが出土している。古墳時代の土坑は中世の溝に切られておりはっきりしないが、溝もしくは古墳になる可能性もある。土坑のなかからは土師器壺などが出土している。

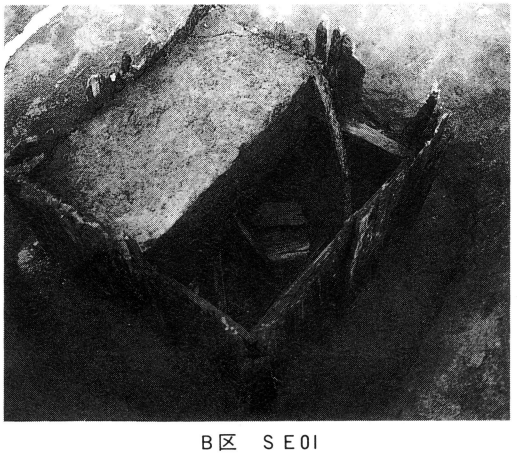
Ｃ区　調査区の北半分からは井戸１基、溝数条、土坑、ピットが見つかったが、南にいくほど標高が下がり、南半分は暗灰色の粘土が堆積し湿地状になっていた可能性がある。

まとめ　今回の調査は幅が狭かったが長さが南北約270Mにわたっていたため遺構の広がり方を知る上で有効であった。調査区の中央部では中世の井戸や南北方向の溝が幾つも発見され集落の存在を想定させるが、南端部は湿地状になり中世の方形の土坑が散在するのみである。

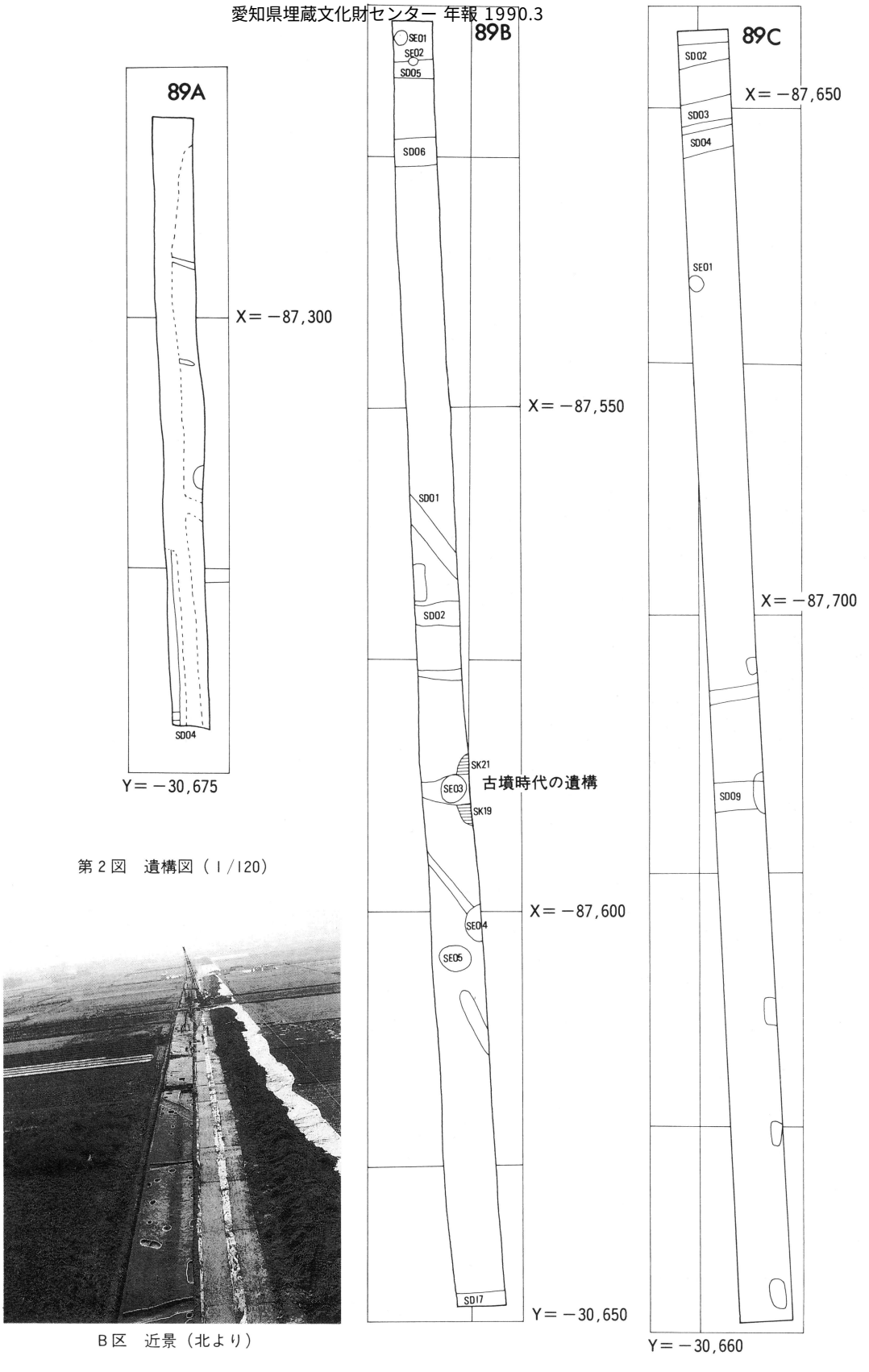
（城ヶ谷和広）



第１図　調査区位置図



Ｂ区　ＳＥ01



第２図　遺構図（１/120）

Ｂ区　近景（北より）

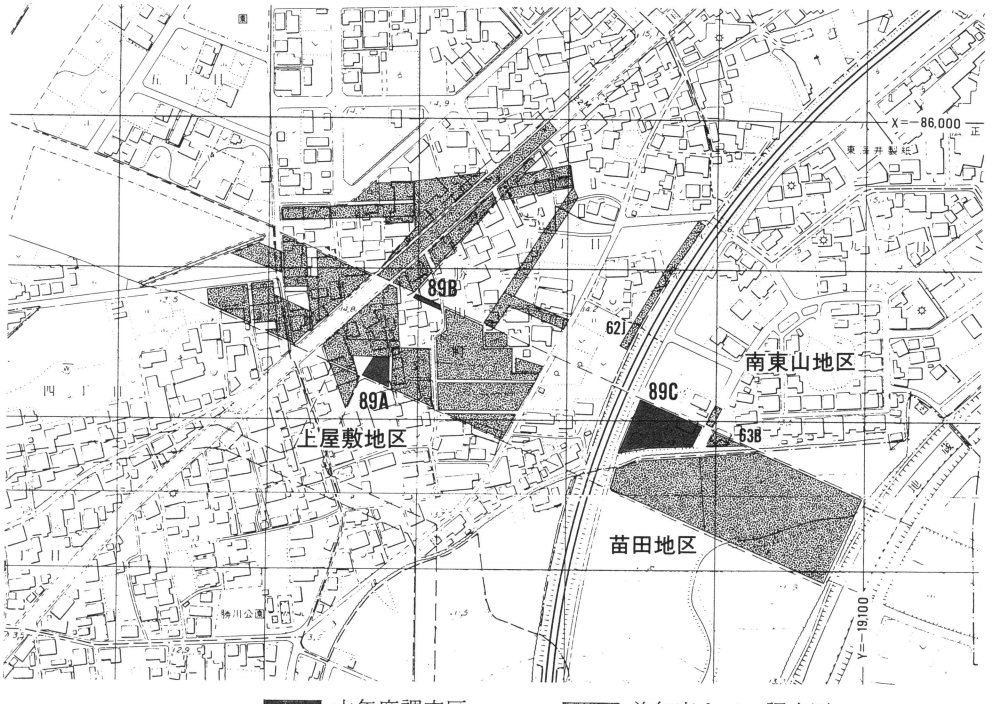
勝川（かちがわ）遺跡

調査経過

春日井市勝川町５丁目一帯は、古くから古瓦散布地として知られており、環状２号線建設・瀬戸線建設・土地区画整理事業を契機として、昭和56年から発掘調査が始まった。本年度までの総調査面積は24,200㎡にのぼる。その結果、鳥居松段丘面の南西端近くに位置する本遺跡は、南に広がる沖積面を含み、Ⅰ期：弥生時代中期、Ⅱ期：弥生時代後期～古墳時代、Ⅲ期：奈良時代～平安時代（勝川廃寺）、Ⅳ期：江戸時代（下街道沿いの宿場町）という大きく四時期に分けられる複合遺跡であることが明らかになった。便宜的に立地と字名をもとに上屋敷地区・南東山地区・苗田地区の３地区に区分している。本年度は上屋敷地区（89Ａ区・89Ｂ区）と南東山地区（89Ｃ区）で調査を実施した。

Ａ区

従来の調査成果から方形周溝墓の検出が予想されたが、南東端の端ＳＤ01から弥生土器が１点出土し周溝と考えられただけで、Ⅰ期からⅢ期の明瞭な遺構は確認できなかった。

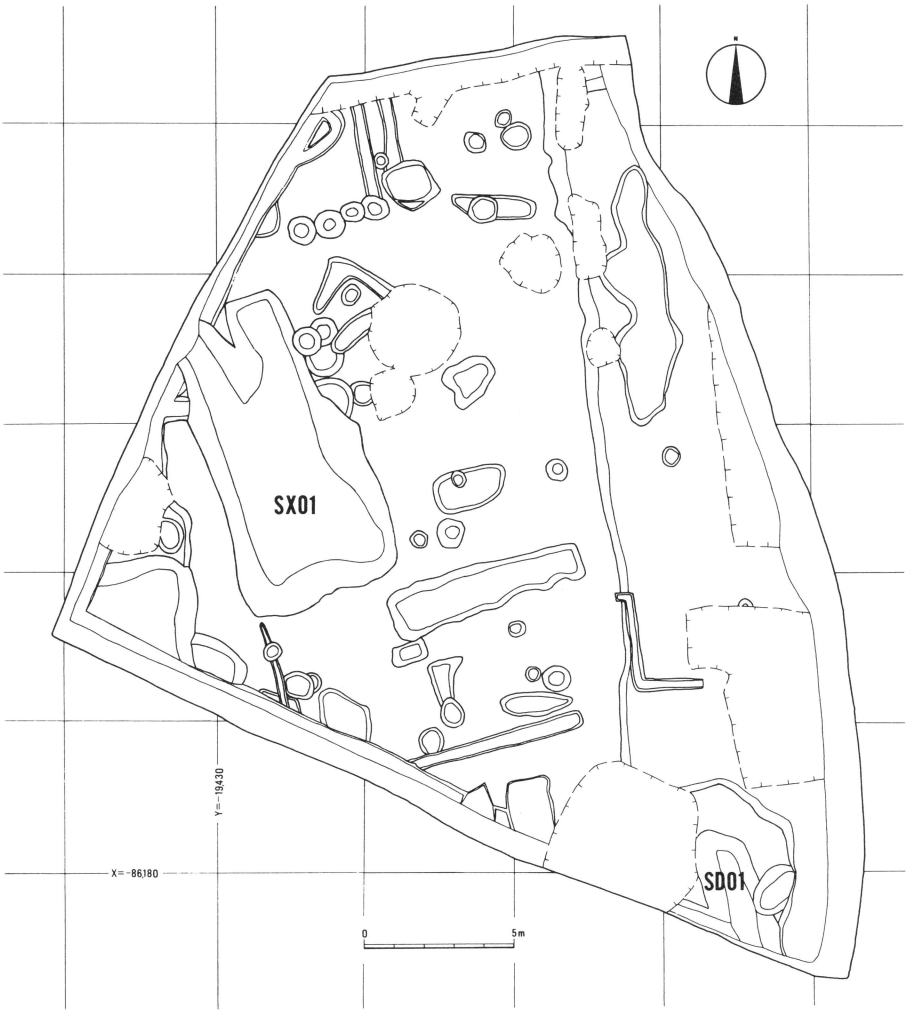


第１図　調査区の位置

下街道からかなり隔たっているにもかかわらず長さ７ｍ、幅５ｍ、深さ1.7ｍを測る大規模なⅣ期の廃棄土坑ＳＸ01を検出した。コンテナ約200箱分の遺物が出土した。その2/3は19世紀のものであるが残る1/3は布目瓦で、軒丸瓦が59点、軒平瓦が63点見つかった。珍しいものとしては緑釉の硯が２点あった。これら多量のⅢ期の遺物はⅣ期の整地に際して邪魔になってまとめて廃棄されたものであろう。



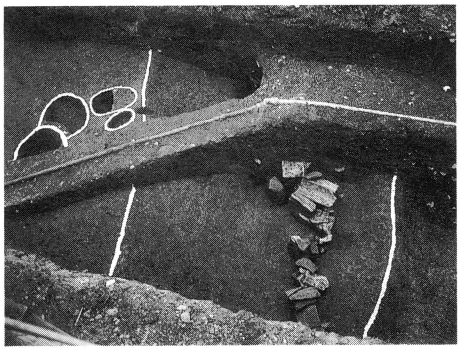
A区全景（北から）



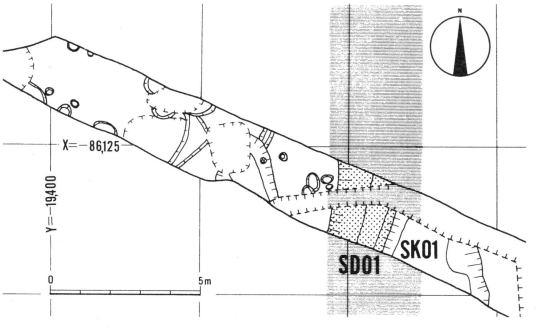
第２図　A区遺構配置図（１/250）

B区

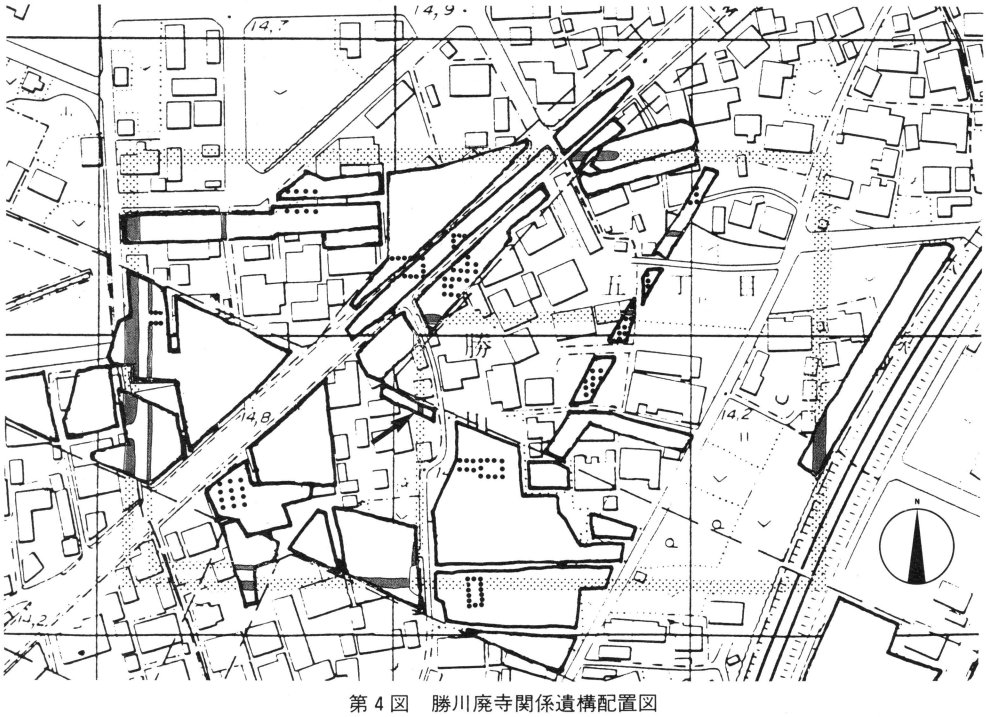
長さ20m、幅３mの細長い調査区である。勝川廃寺の寺域内を区画する南北溝を推定位置で検出した。溝は幅１m、深さ0.5mで、二次堆積ながら底から瓦が列をなして出土した。この溝の東にⅣ期の廃棄土坑ＳＫ01があり、江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器の良好な一括遺物が出土した。廃棄土坑が下街道からすこしはなれて検出されることは、街道沿いの家屋の裏に掘削されたものだからであろう。これらのほかにも溝や土坑を検出した。遺物を伴わないが、埋土からいずれもⅣ期の遺構と考えられる。



B区　ＳＤ01（南から）



第３図　B区遺構配置図（1/250）



第４図　勝川廃寺関係遺構配置図

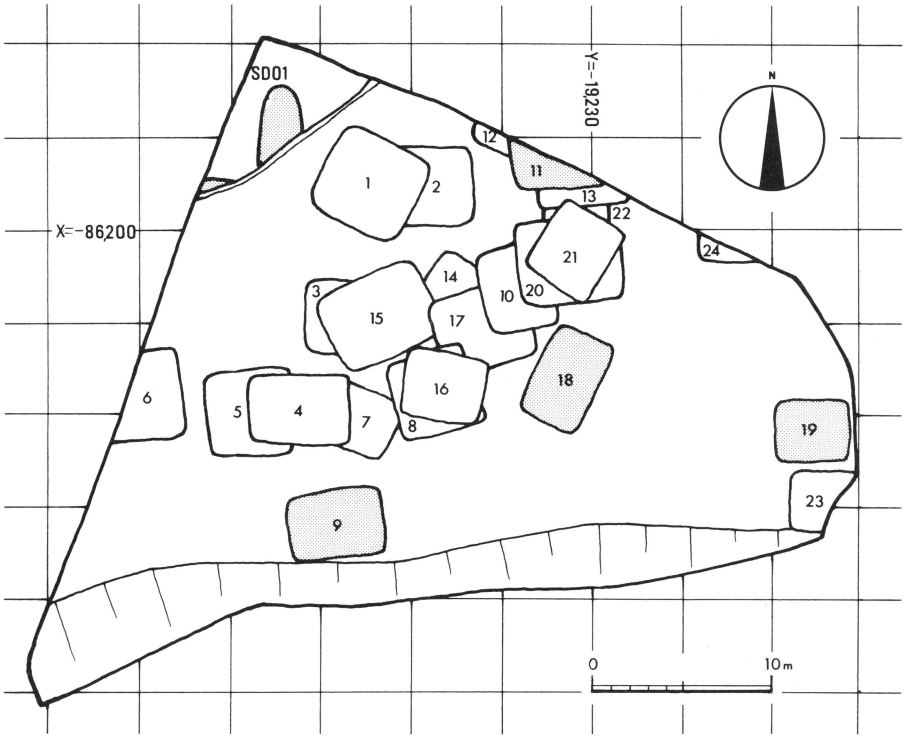
C区

昭和59・61年度の調査で弥生時代の多数の掘立柱建物や木製農具などの未製品の貯蔵施設が見つかった苗田地区を見下ろす鳥居松段丘面の縁辺部にあたる。一辺が5～6mの方形の竪穴住居を二十数軒検出した。弥生時代中・後期の土器が多数出土している。苗田地区で生産活動をした人々の居住地をここに求めることができよう。弥生土器の他に須恵器や灰釉陶器、瓦を伴うものがあり、数軒はIII期の奈良～平安時代に属すと考えられる。溝SD01は幅2.6m、深さ0.3mを測り南北方向にのびる。

まとめ

今までの調査から、勝川I期の居住域は89C区の北東100m付近を中心とすること、62J区SD22と63B区SD01が環濠である可能性が高いことなどが指摘されてきた。しかし89C区で検出した竪穴住居がすべて環濠の外にあったことになるので、再検討が必要であろう。

（松原隆治）



第5図　C区遺構配置図(1/400、アミはIII期の竪穴住居)

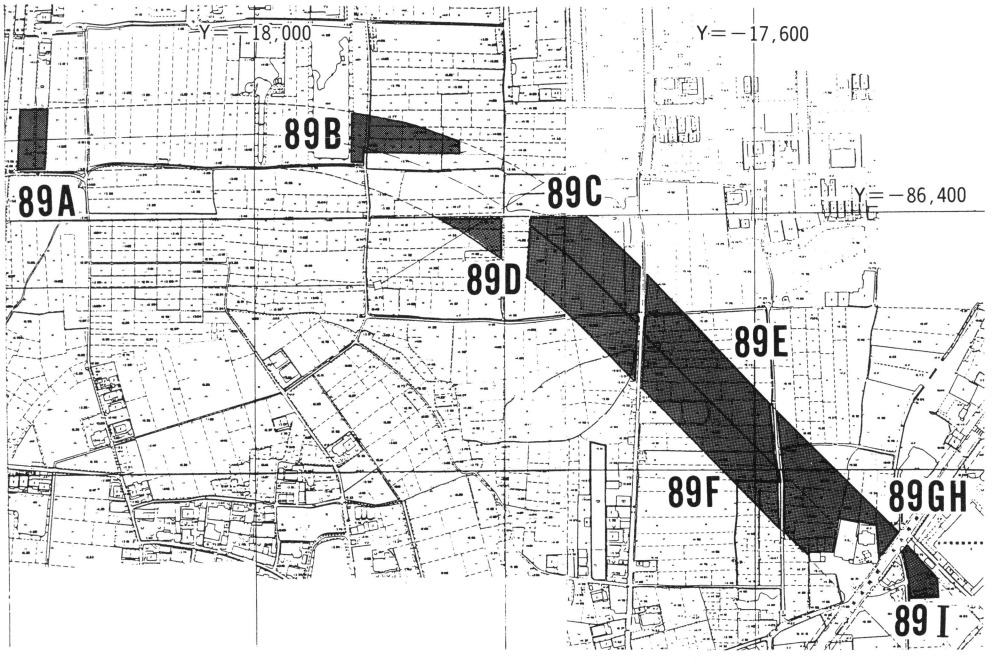
松河戸（まつかわど）遺跡

調査に至る経過

松河戸遺跡は春日井市の南東方、庄内川と地蔵川に挟まれた標高約15mの沖積地に立地する。松河戸町一帯は、方格地割の畦畔（水田）が近年まで遺存する県内でも有数の地域であり、その畦畔の形状から「条理制遺構」との関連が注目され、特に「醍醐寺文書の安食荘」の記載との関係を結びつけるという文献史学・歴史地理学によって研究されてきた。

そういう地域に名古屋環状２号線建設に伴う発掘調査を昭和62年８月より実施してきた。昭和62年度の調査では、上層に15世紀代を上限とする水田跡を４面（水田跡Ⅰ～Ⅳ）検出し、下層では、微高地上に縄文時代前期～後期・古墳時代前期～後期の遺構や遺物を検出した。昭和63年度では、上層は同じく水田跡を検出し、下層の微高地上で縄文時代早期～前期・後期と古墳時代の遺構・遺物を検出した。

今年度は９調査区を設定し、その中に昭和61年度試掘調査（ＴＴ10・11）地点が入る。その時に、中世の遺構面や遺物包含層を確認し、柱穴・溝の検出などから中世の居住域を推定したところであり、中世の村落の一端が判明できた。また、上層の水田跡の範囲や下層の微高地で弥生時代の遺構・遺物も検出された。（神谷友和）



第Ⅰ図　調査区位置図（１／6000）

調査の概要

3年間で総長2km・面積約6万㎡・を発掘調査し、検出した遺構・遺物の内容から5期に区分できる。Ⅰ期は縄文時代早期～後期、Ⅱ期は縄文時代晩期～弥生時代前期、Ⅲ期は古墳時代、Ⅳ期は鎌倉時代、Ⅴ期は室町時代後期～江戸時代である。

Ⅰ期～Ⅳ期は下層で検出した遺構で、微高地上に立地する。Ⅰ期は、前期の竪穴住居（63L区）や中期の集石遺構（62F区）を帯状に延びる微高地の2ヶ所で検出し、他の5ヵ所の微高地でも土器が出土していて、そのような場所を選んで生活していたのだろう。石器には決状耳飾・縦型の石ヒが出土している。

Ⅱ期は、89D・E区（第3図）で溝と土坑を検出した。SD120（自然流路）は下層で縄文土器・上層で弥生土器が出土し、縄文時代晩期末から弥生時代にかけての遺構であることが解った。前期の土坑3基があり、稲作農耕のために一度は定住を試みたのだろう。出土遺物には、遠賀川系土器と条痕文系土器が共伴し、その割合は6対4で遠賀川系土器が優位を占める。SD120に注ぐSD05は狐状に回りその内側に居住域が想定できる。さらに、SD05は環濠の可能性が考えられる。主な出土遺物には、独鈷石・打製石斧や丸木弓、SD120下層より植物遺体（クルミ・クリ・ヒョウタンなど）が多数出土した。

Ⅲ期は、62AB・63DE・89A区で検出し、62A区SK201出土の一括資料は古式土師器編年の標式（松河戸式土器）となっている。いくつかの微高地で溝などを検出し、木製品などが出土している。

Ⅳ期は、89D・E・F・GH・I区の2ヵ所の微高地で多数の溝とピットを検出した。溝は微高地に沿って設けられているものと方位を意識しているものと2者があり、ピットが集中している地域があり、掘立柱建物群や杭列をもつ屋敷地が想定でき、多数の溝は、屋敷地を区画するためのものや水路と関連するものであろう。遺構によっては、一括資料として充分な量の陶器を出土し、本遺跡の消費地の状況から近接する生産地との流通を推測することも可能である。主な遺物に墨書陶器があげられる。

Ⅴ期は、上層で検出した方格地割の水田遺構であり、全調査区に広がり地形に合わせて東西・南北方向の長地型地割に設定されている。水田面は場所によって4面（水田Ⅰ～Ⅳ）あり、上限は15世紀代と考えられ、Ⅳ期の水田遺構は確認できなかった。地籍図と発掘調査の結果からみて近年までほぼ同じ位置に畦畔が設けられたと判断できる。

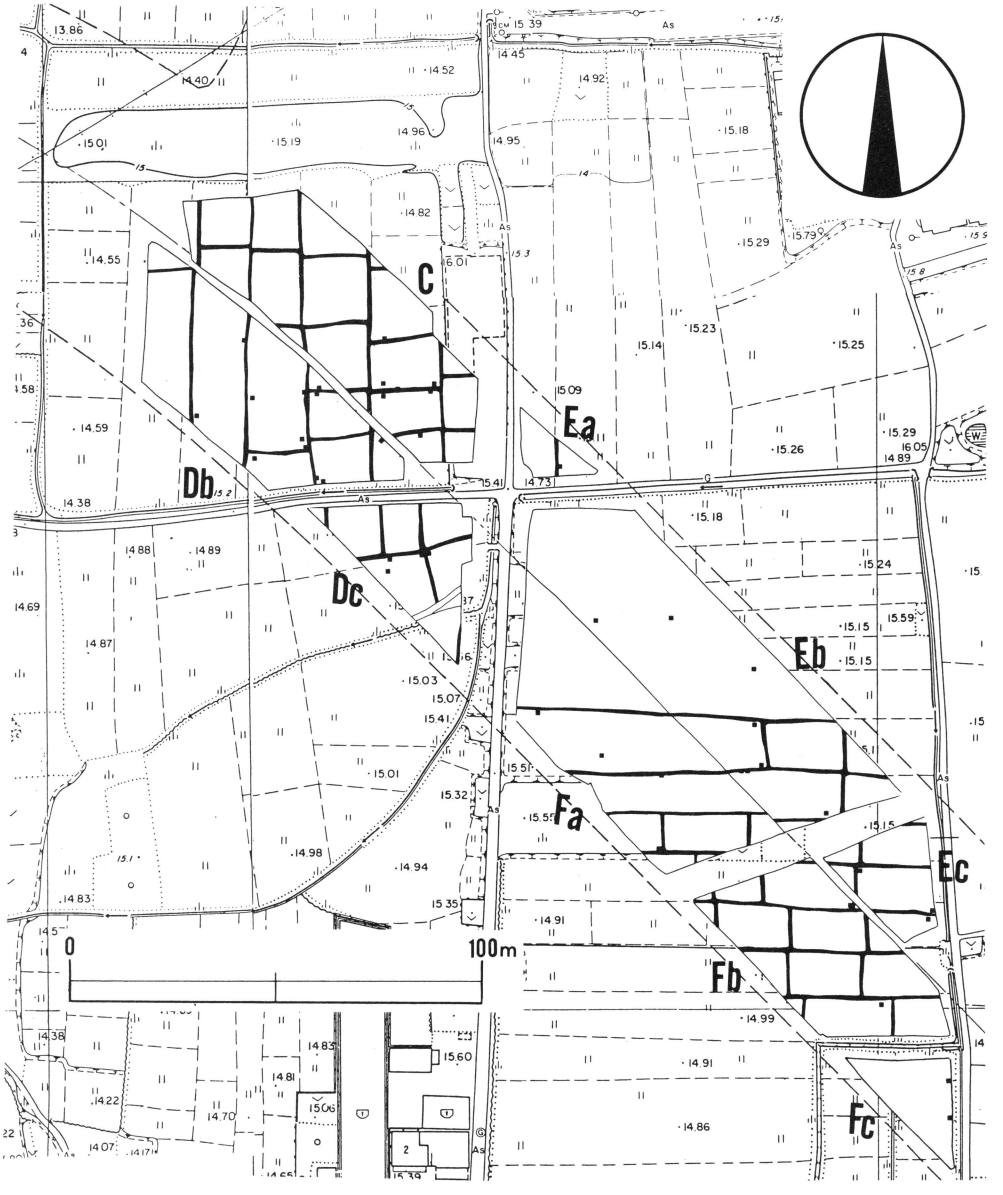
おそらく、Ⅰ期の縄文時代より微高地に人が生活していて、室町時代までは地形に左右されて営んでいたのであろう。それが、室町時代後半頃より水田開発が頻繁になり、それまでの微高地が削平・開墾されたといえそうである。広範囲の調査で「条里」の施行時期が判明できたことは大きな収穫であったといえる。　（神谷友和）

Ⅴ期（条里制遺構）

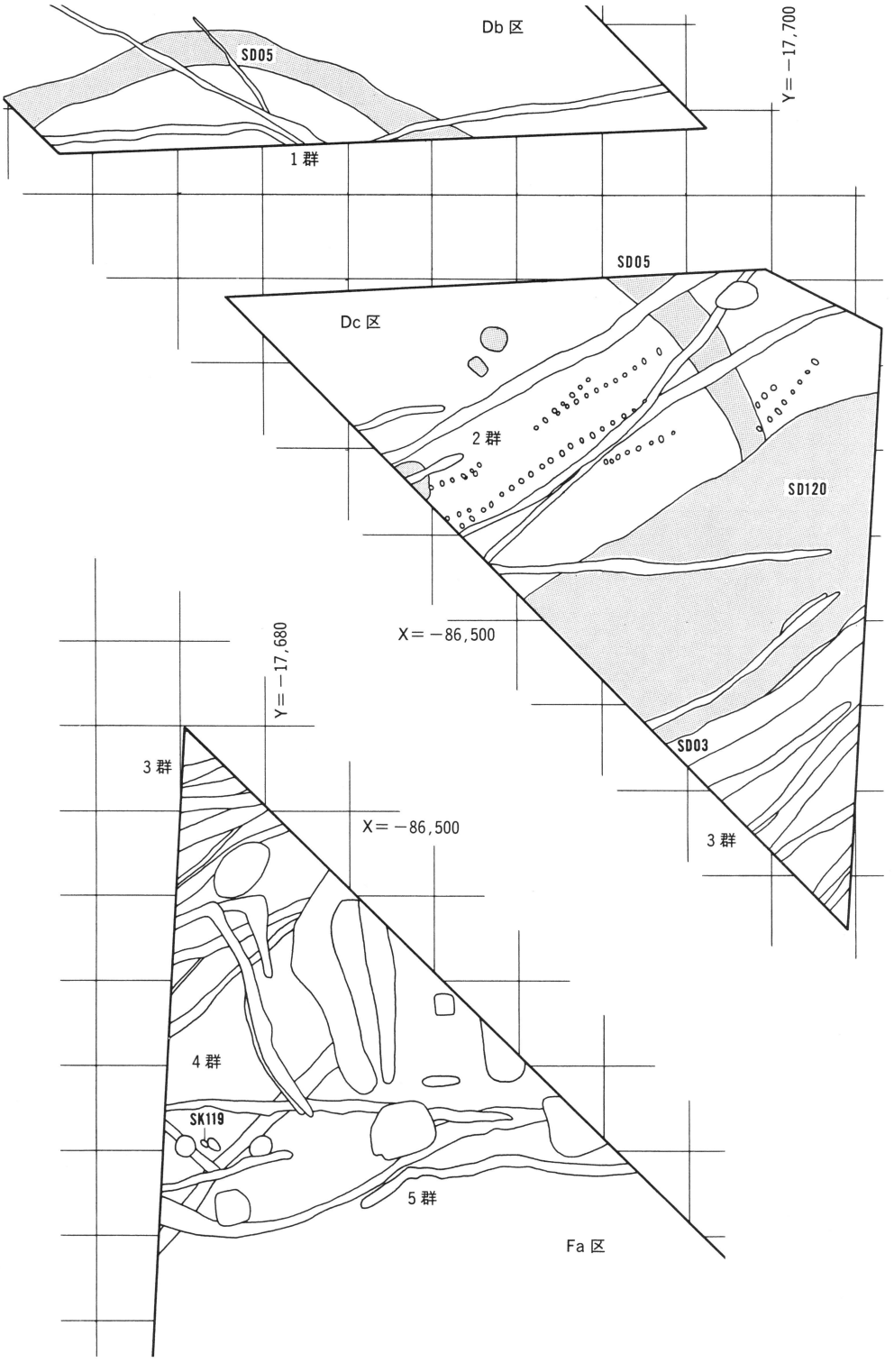
A～Hの各調査において、条里制地割に基づくと考えられる水田を検出した。

C・Db・Ea区では南北方向の長地型地割、Eb・Ec・Fa・Fb区では東西方向の長地型地割の水田を検出した。多いところでは現水田下に4面の水田面が確認され、その最下層は15世紀後半にさかのぼりうるものと考えられる。

なお、Fa・Eb区北半では、基盤が高いため、畦畔を確認できなかったが、土坑の存在等により、現水田より古い水田があったものと考えられる。　（後藤浩一）



第2図　水田遺構配置図（■…土坑）



第３図　Ｄ・Ｆ区主要遺構配置図（アミ部分はⅡ期の遺構）

II期

C～F区の基本層序は、中・近世の水田耕土以下に中世の遺物を包含する灰色粘土層が堆積し、その下の黄灰色シルト層が基盤となる。調査区北・南側では灰色粘土層が厚く堆積し、黄灰色シルト層は確認できなかった。下面の遺構は、この東西方向に帯状に細長く伸びる黄灰色シルト層を基盤とする微高地に立地している。

縄文晩期後半・弥生前期の遺構をD区において検出した。SD120は浅谷状の地形をなし、下層の木本質泥炭層では縄文晩期後半の土器とともに、丸木弓、木製品、打製石斧が出土し、上層では弥生前期後半の土器とともに石剣が出土した。SD120のセクションより、下層は人工の可能性も考えられるが、上層は自然河道であったと思われる。

弥生前期の遺構は自然河道（SD120上層）とつながり円弧状にめぐる溝（SD05）と土坑3基を検出した。遺構は後世の耕作等により削平を受けており、その全容は不明であるが、土坑の位置より自然河道（SD120上層）と溝（SD05）に囲まれた地区に集落が営まれていたと考えられる。発掘区外に南西方向に伸びるSD05を考慮すると直径約55mの半円状の溝をめぐらす集落が想定できる。

出土遺物は遠賀川系の壺・甕、条痕文系の壺・深鉢があり、遠賀川系土器を主体とし、条痕文系土器が共伴していた。時期は西志賀期に比定される。なお、調査区北側の灰色粘土層より独鈷石も出土しており、尾張地方では珍しい例である。

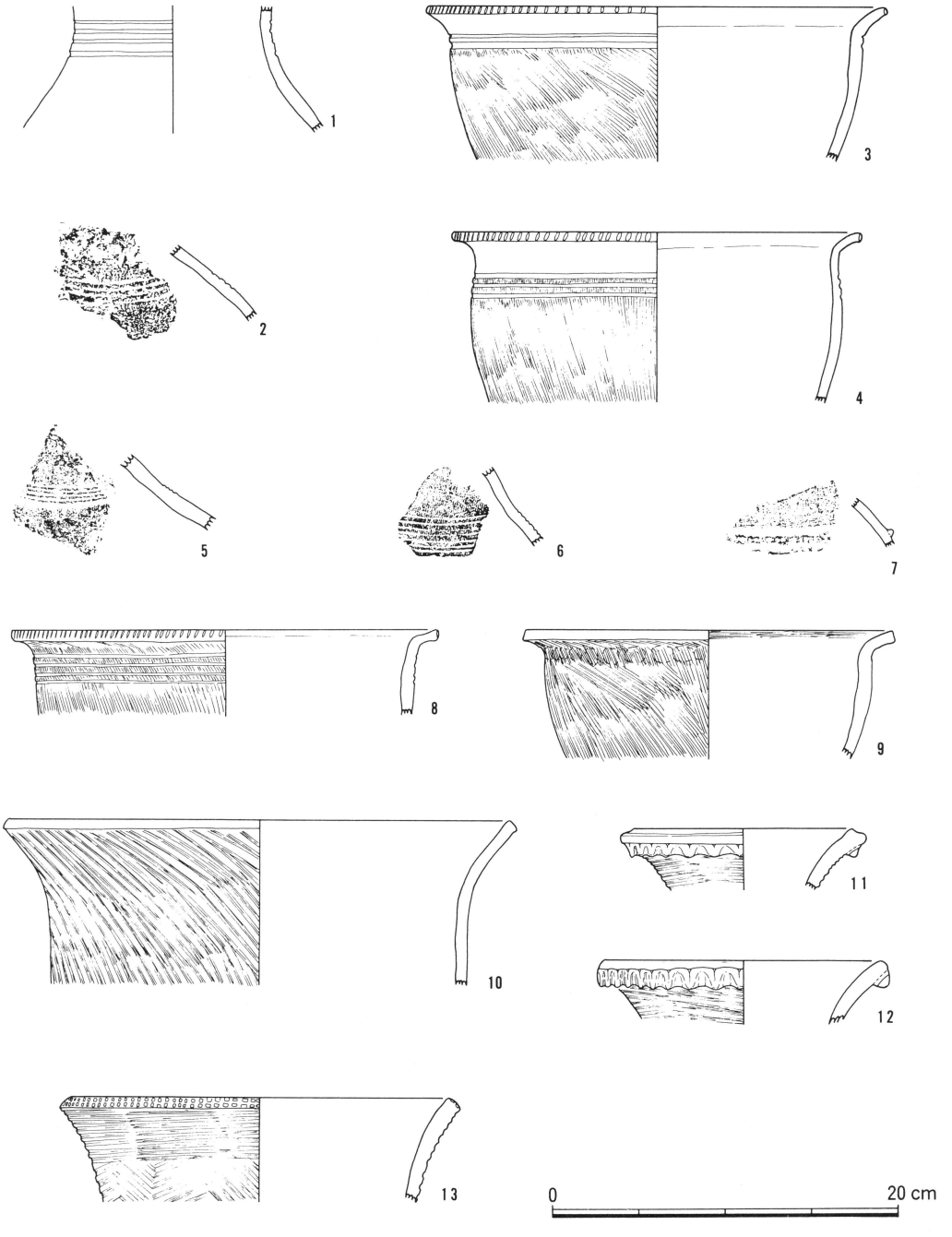
松河戸遺跡ではこれまでの調査でも礫層の微高地より、縄文早期末から後期にかけての遺構が確認されている。本年度調査した微高地はそれらと異なり、遺跡の立地の面でも注目される。これらの資料は庄内川中流域における縄文時代から弥生時代への展換期を解明するうえで貴重な資料となるであろう。　（後藤浩一）



SD05遺物出土状況



丸木弓出土状況



SK 102：1～4、SD 05：5～12、SK 101：13

第4図　弥生土器

Ⅳ期（D区）

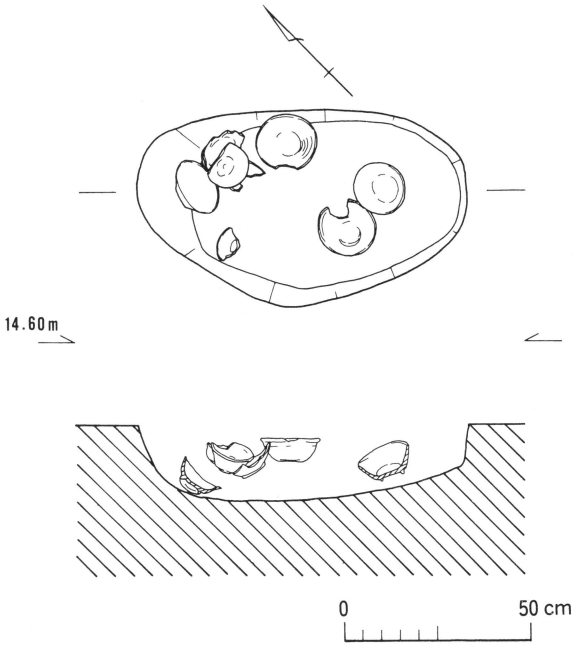
Ⅳ期の遺構は、II期の遺構と同一面で検出した。その立地はII期と同じ微高地上であるが、II期の遺構が89Dc区以西にその中心を持つのに対し、Ⅳ期は帯状微高地全面に存在する。

この時期の主な遺構は溝であり、ほぼ全域に広がるが、その形状から5地区に分類できる（第3図）。その他の遺構として土坑・ピット等が見られるが、それぞれ地区が限定されている。そこで、他の遺構との組合せも含め、各々の性格について考えてみたい。

最も北に位置するのが、幅0.3m・深さ0.1mの「U」字掘溝群（1群）である。これらは微高地より北の低地帯にあり、1点から3方に向かって放射状に広がる。地形が広範にわたって平坦であることから、水田に関係する溝であろうか。溝以外の遺構は見られない。その南は、幅0.8m・深さ0.1mの「U」字掘溝群（2群）であり、微高地北部に位置する。この地区には、ピット列が9列検出されており、その中には平行関係を持つものも見られるため、この地区は通路に関係するものと考えられる。その次に、幅0.7m・深さ0.2mの箱掘溝群（3群）がある。微高地中央部にあたる。溝の密度が濃く、切り合いも激しい。水路の地区と思われる。2群と3群の境界には、幅2.0m・深さ0.7mの溝（SD03）がある。これはⅣ期の溝の中で最大規模のもので、その埋土に厚く砂層を持つ。この位置には、Ⅴ期以降現在まで水田用水路が存在していることから、Ⅳ期から長く受け継がれた基本水路であろう。次に、幅0.7m・深さ0.3mの「V」字掘溝群（4群）が微高地南部にある。これらの溝は直角に曲がるものを中心とし、その他の遺構としてピット群が検出されている。ピットが柱穴、溝が屋敷地を区画する意味を持つと考えられ、4群地区は居住域と想定できる。最も南には、幅0.7m・深さ0.1mの浅い溝群（5群）があり、微高地南端部に位置する。該当する溝はわずか2条のみである。これより南に遺構はまったく見られない。そして、この無遺構地帯が低湿地帯であり平坦面であることから、1群と同じく水田の可能性がある。

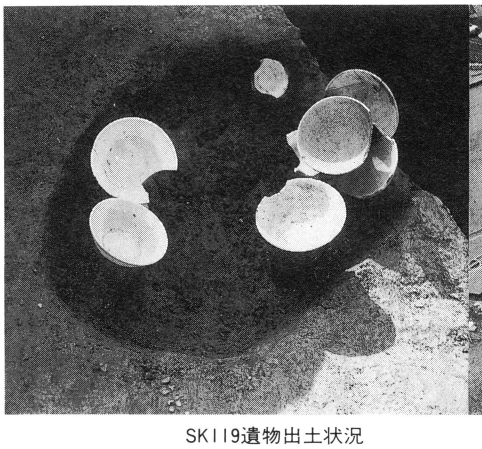
出土遺物としては、灰釉系陶器がその大半をしめる。俗に「山茶椀」と呼ばれるもので、表面がザラつき厚手の椀（椀A）と表面の滑らかな薄手の椀（椀B）が各遺構において共伴する。例えば、SK119では8個体出土している（第5図）が、椀Aと椀Bが4個体づつとなっている（第6図　1～4椀A、5～8椀B）ように、両者の優劣は付けにくい。

灰釉系陶器は瀬戸古窯跡群・美濃古窯跡群等、生産地における研究が先行しているが、消費地から研究を進めるうえでこれらの資料は貴重である。　　（岡本直久）



第15図　SK119遺物出土状況

第 6 図　SK119出土遺物



SK119遺物出土状況



Fa区全景

Ⅳ期（G・H・I）

上面G・H区でⅤ期の条里型水田を10筆検出した（ST01～10）。ST01～07は東西方向の、ST08～10は南北方向の長地型地割である。地形的に西が低く東に向かって高くなっているため、水田面は、現水田下に、ST10・05とST06・07西半部で2面、ST06・07東半部とST02・03・04・08・09・10では一面で、ST10以東とI区には水田面はなかった。さらに、ST01以南は地形的に低く、近年まで苗田となっていたとのことで、やはり近世の水田は存在しなかった。

下面Ⅳ期（12～13世紀頃）の屋敷地と考えられる遺構を検出した。G・H区での遺構のひろがりはSD01・105・106・107を南限とし、西はSD112・115・116・123を境に低地に接する。溝はいずれもほぼ正方位に配置されており、数箇所で重複が認められる。ピットは調査区全域にわたってみられるが、SA01～03を除くと建物としてはまとまらない。しかし、SD104以南には径10cm程度の柱根が遺存するピットもあることから、溝に区画されて数棟の掘立柱建物群が存在したものと思われる。I区では当該期の溝を3条検出した。とくにSD01は、地籍図から、南に道が位置する側溝と推定される。なおI区ではさらに下に9世紀の溝3条と土坑を確認した。SD05からは風字硯や馬歯が出土した。

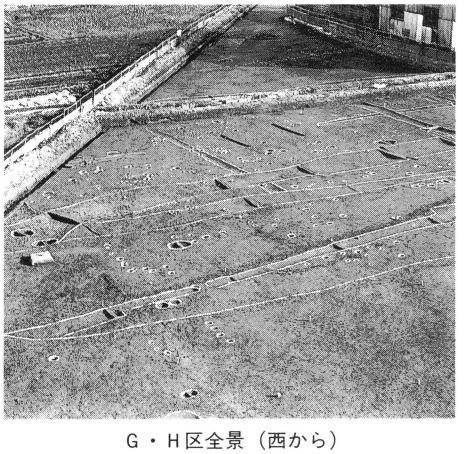
（松原隆治・樋上　昇）



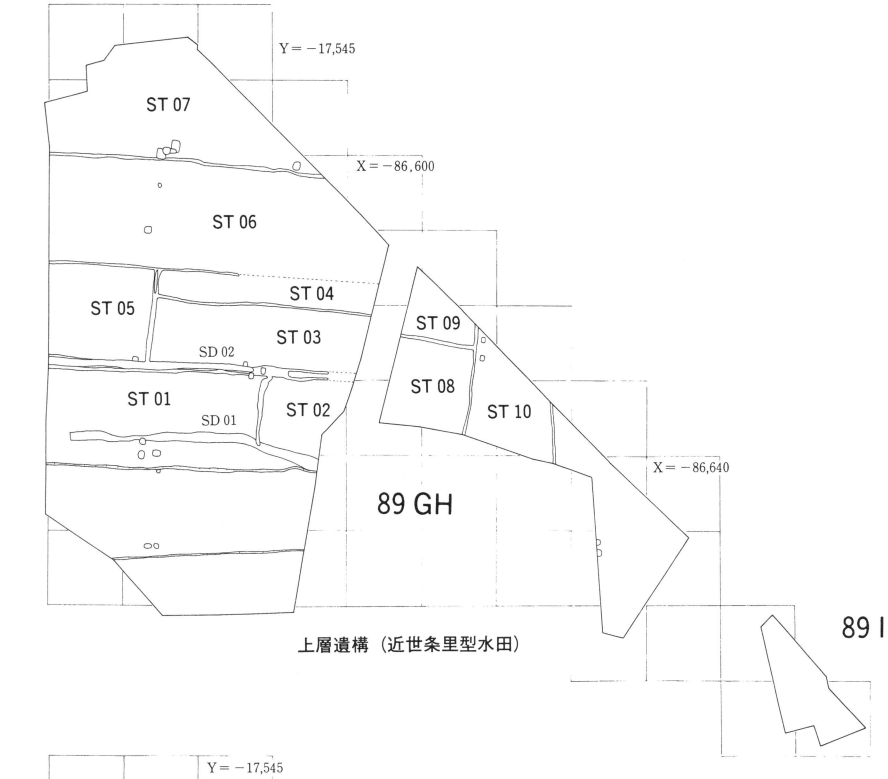
G・H区SD01遺物出土状況



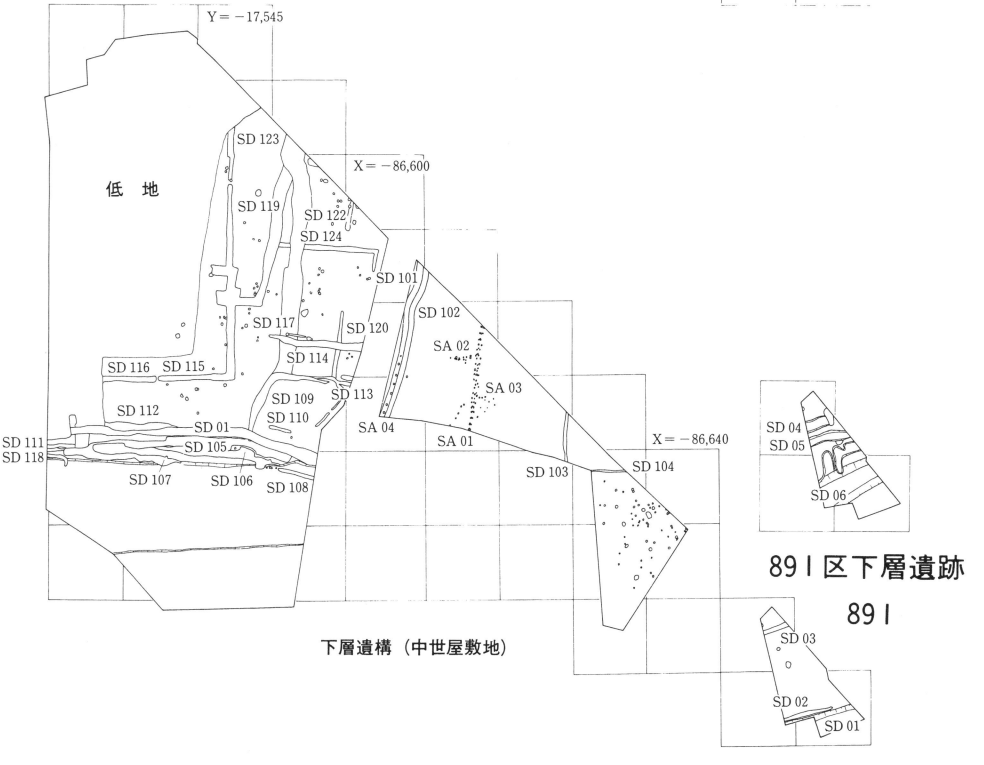
I区全景（南東から）



G・H区全景（西から）



上層遺構（近世条里型水田）



下層遺構（中世屋敷地）

第 7 図 G ・ H ・ I 区遺構配置図（ 1 /1000）

岩倉城遺跡

調査の経過

岩倉城遺跡は戦国時代の岩倉城の時代を中心とする遺跡で、岩倉市下本町から大市場町にかけて所在する。岩倉城は五条川中流域右岸を中心に標高約10mの自然堤防上に立地する。県道萩原多気線建設に伴う事前調査として昭和63年１月より発掘調査を実施し、調査面積は62年度760㎡、63年度1,470㎡、本年度5,240㎡である。前年度までの調査で、岩倉城の西側の二重堀の規模・構造や本丸内を区画する溝等が確認されている。

本年度の調査では、Ｂ・Ｃ区でそれぞれ幅約20m・深さ７m、幅約12m・深さ3.5mの堀が確認され、63年度調査の堀とほぼ同規模であり、東の二重堀にあたると考えられる。さらに、五条川左岸のＥａ、Ｆ区でも幅約８～９m深さ約2.5mのほぼ同規模の堀が確認されたことから、岩倉城の規模が従来考えられてきたよりも拡大する可能性が高い。また、Ａ区では本丸内を区画する溝２条が確認され、特にSD03（幅約３m・深さ約1.7m）は館を区画する溝で、62年度調査のSD01、SD03に続くものと考えられる。さらに、SD03の東側一面に落城時のものと考えられる炭化物、焼土が柱穴等多数の遺構の直上で確認された。

遺構を確認できなかった時期もあるが、弥生時代から戦国時代の土器が出土し、Ⅰ期：弥生時代、Ⅱ期ａ：古墳時代前期、Ⅱ期ｂ：古墳時代後期、Ⅲ期：奈良時代、Ⅳ期：平安時代、Ⅴ期：鎌倉・室町時代、Ⅵ期：戦国時代という岩倉城遺跡の時期区分を想定した。

（山仲廣司）



第Ⅰ図　調査区位置図（1/5000）

調査の概要

Ａ・Ｂ・Ｃ区の調査

Ａ・Ｂ区　Ⅰ期の遺構としては、弥生時代後期の竪穴住居を８軒検出した。

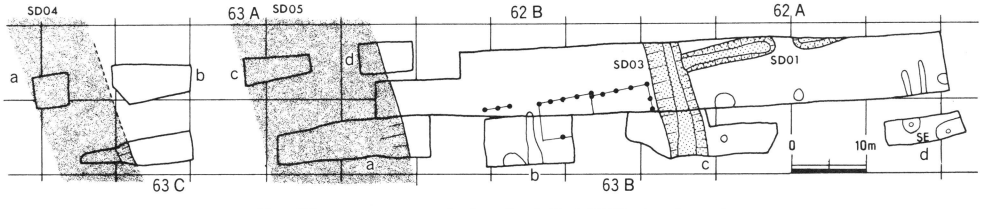
Ⅵ期の遺構については、大小の溝、多数のピット、土坑を検出した。この中でSD01は幅20ｍ、深さ７ｍの箱堀りの溝で、堀と呼ぶにふさわしいものである。この溝は63Ａ・Ｂ区で確認されたSD05と規模、埋土等が似ており、両者で二重堀の「内堀」を構成するものと考えられる。遺物は当該期の陶磁器片がごく微量出土した。次にSD03は幅３ｍ、深さ1.7ｍの断面Ｖ字形の溝で、堀り返しが一度認められる。遺物は上の新しい溝から大量の土師皿が、下の古い溝から下駄、箸等の木製品が出土している。この溝についても、62、63Ｂ区で確認されたSD03と、遺物の出土状況、堀り返しのある点など類似点が多く、両者は本丸内の区画といった同様の機能を持つものと考えられる。最後に１つ注目されるものは、遺構の直上で炭化物、焼土の面的な広がりを確認したことである。特にSD02と03の間で顕著に見



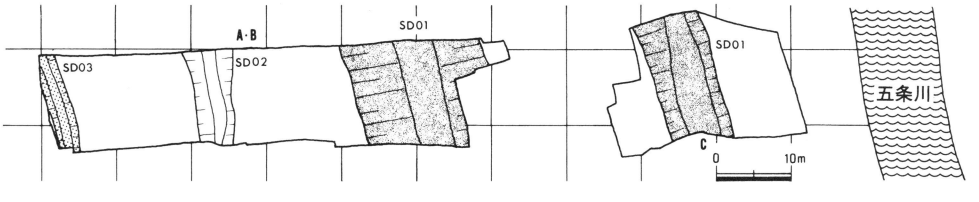
Ａ・Ｂ区　SD01（西から）



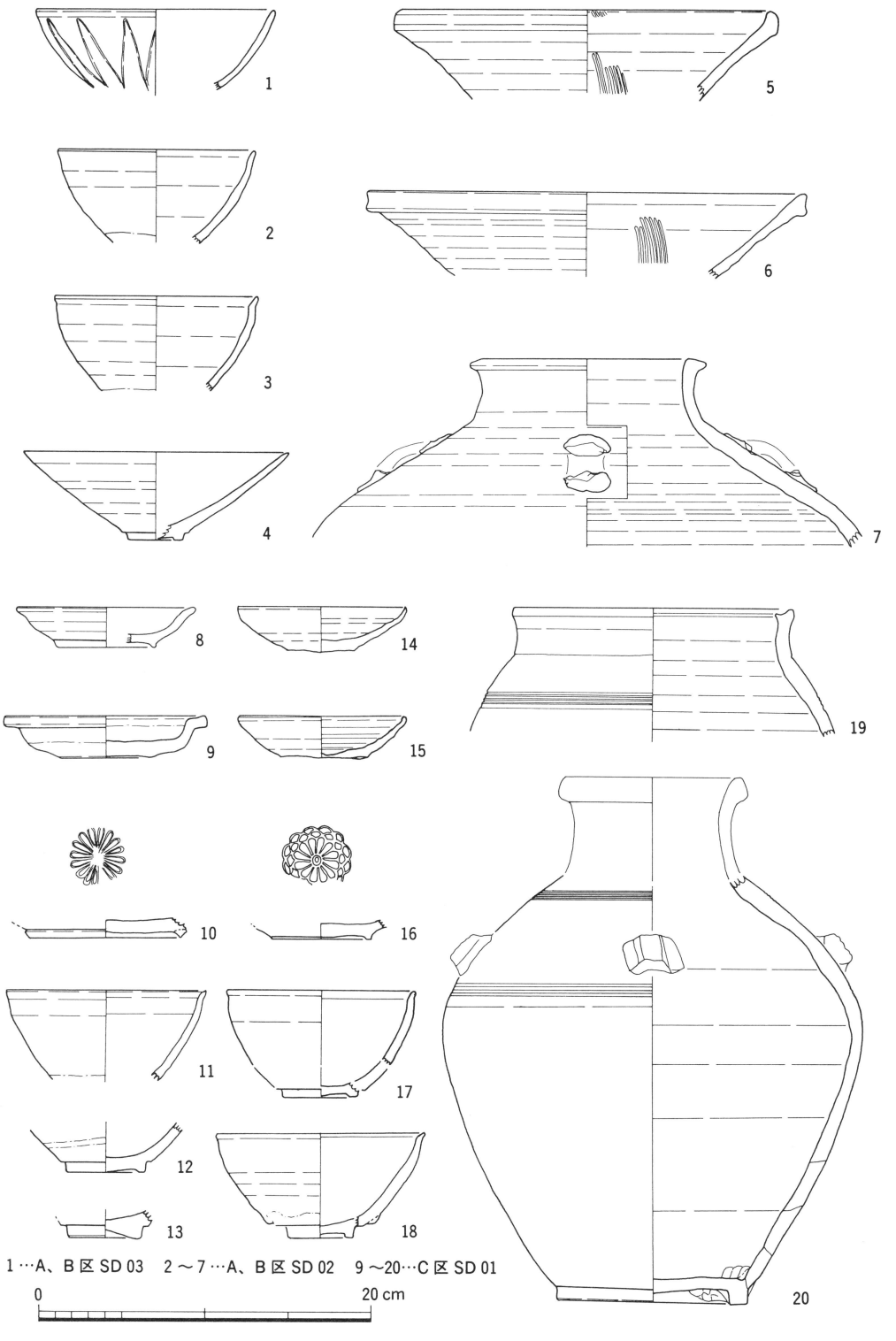
Ａ・Ｂ区　SD03遺物出土状態（西から）



第２図　昭和62・63年度Ⅵ期遺構配置図（１/1000）



第３図　Ａ・Ｂ・Ｃ区Ⅵ期遺構配置図（１/1000）



第4図　A・B・C区Ⅵ期出土遺物（1／4、20のみ1／6）

られ、遺構の埋土にも多く含まれていることから、火災にあった可能性が高く、文献史料とあわせて落城時の様子を考える一つの手がかりとなりそうである。



C区　SD01（北から）

C区　Ⅰ期の遺構としてSX01、02を確認した。これは径が不揃いの円礫を不定形及び帯状に集積したものであるが、遺物がほとんど出土していないことや、他に遺構が存在しないこともあり性格は不明である。

Ⅵ期については南北に走る大溝を確認した。SD01は幅13m、深さ3.5mの箱堀りの溝で堀と考えてよく、63A・B区のSD05とともに二重堀の「外堀」を構成するものと考えられる。遺物は、擂鉢、天目茶椀、四耳壺等、当該期の遺物が出土している。なお、このSD01とA・B区SD01の間約20mは無遺構であり、土塁等の存在も考えられる。　（金子健一）

D・E・F区の調査

Ⅰ期　F区において、弥生時代後期の方形周溝墓を1基検出した。

Ⅱa期　Ea区下層において、古墳時代前半期の土器集積遺構（SX01）及び井戸状遺構（SE01）を検出した。各遺構からは、壺・小型丸底土器・器台・S字甕など比較的まとまった土器が出土しており、当該期の土器編年を考えるうえで貴重な資料になると思われる。また、包含層中からではあるが、駿河系土器の特色を持つ土器片も出土している。

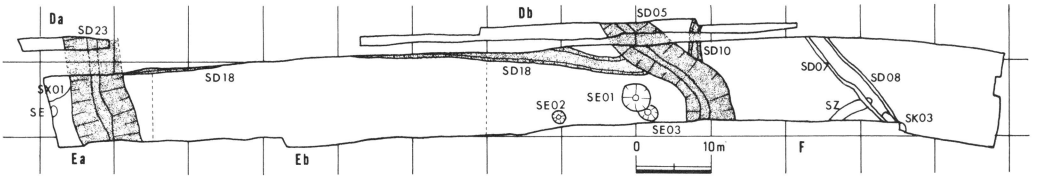


F区　SE01（北西から）

Ⅱb・Ⅲ期　遺物の出土はみられたが、明瞭な遺構は確認できなかった。

Ⅳ期　F区において、土坑1基（SK03）と溝2条（SD07－SD08）を検出した。

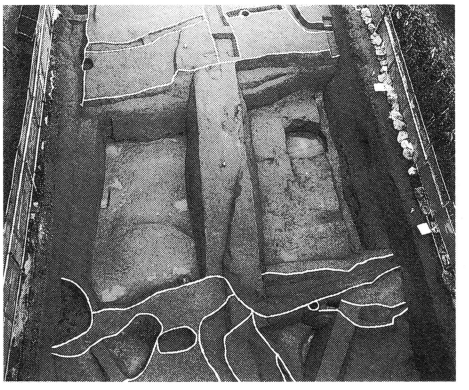
Ⅴ期　F区において、井戸を3基検出した。SE01は径3.7m、深さ2.5mを測る。1.1m四方



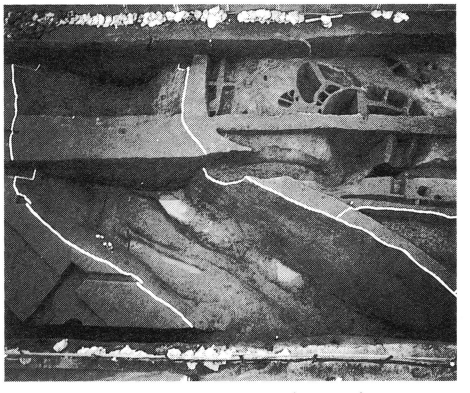
第5図　D・E・F区遺構（1/1000）

の井戸枠、曲物等内部構造が良好な形で残存しており、13世紀後半頃に比定される灰釉系陶器が多量に出土した。SE03からは遺物の出土はみられなかったが、01より切り合い関係からみて若干先行すると思われる。また、SE02からは14世紀前半の灰釉系陶器が出土した。

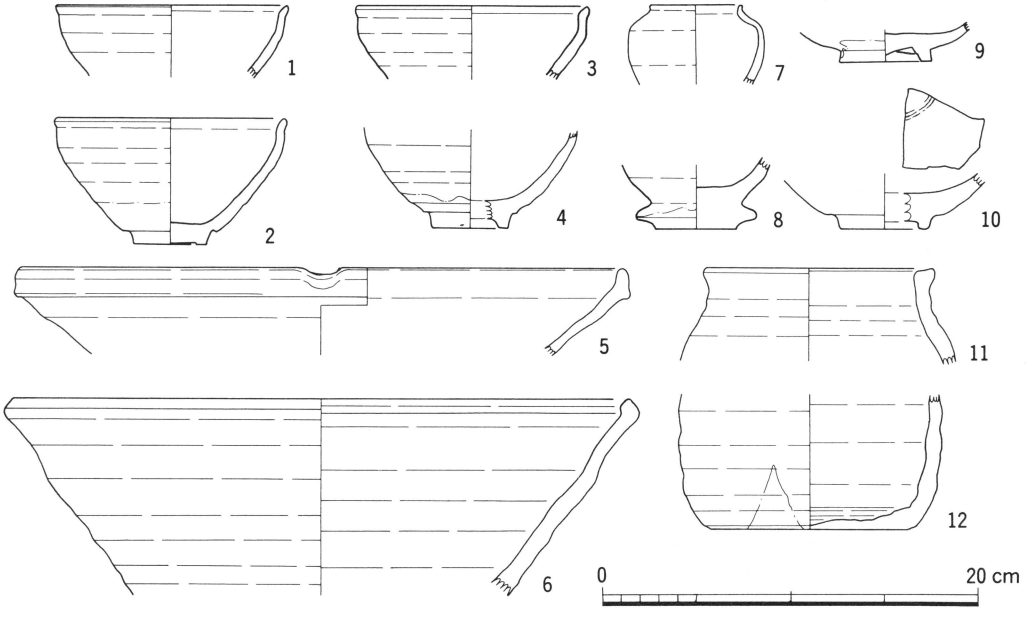
Ⅵ期　Da・Ea区においてSD23、Db・F区でSD05という二本の大溝を検出した。SD23は、幅９ｍ・深さ2.5m、SD05は発掘区中央で大きく屈曲するが幅８ｍ・深さ2.3m程の規模を有する。溝の断面は、共に緩やかなＶ字形をしており、滞水状況は認められなかったが、岩倉城の施設を囲む堀である可能性が高く、当該期の陶磁器片を中心とした遺物が少量出土した。他の遺構としては、東西方向に延びる幅2.5m・深さ0.8mのSD18、SD05に切られるSD10等を確認した。　（服部信博）



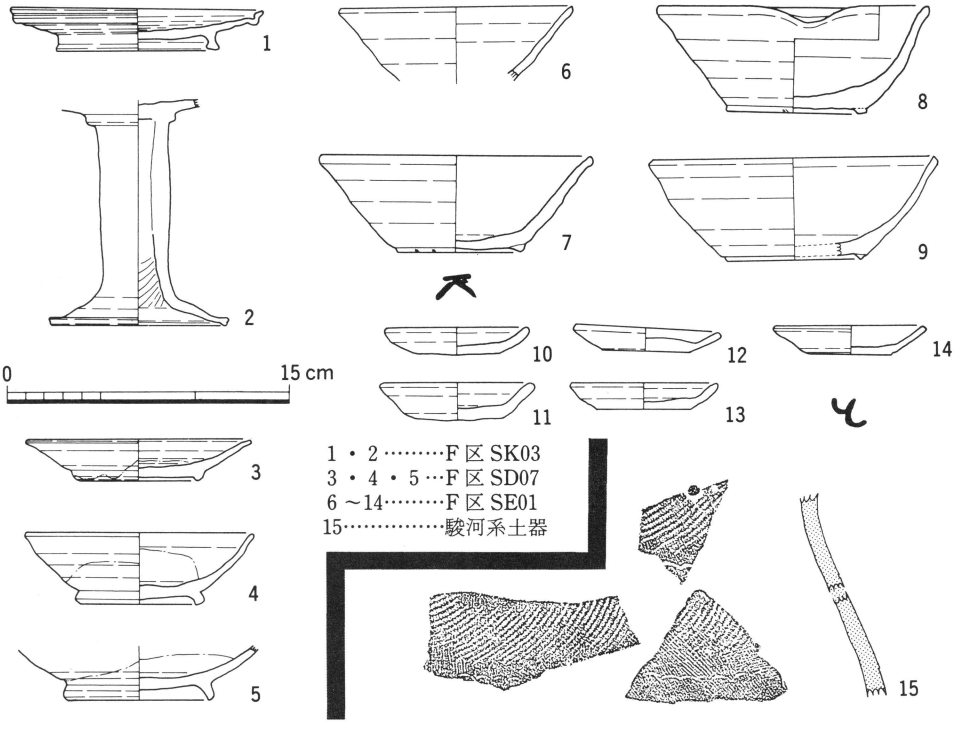
Ea区　SD23（西から）



F区　SD05（北から）



第６図　D・E・F区Ⅵ期出土遺物（１/４）　１～３・５・７・８……SD05、４・６～11……SD10
９・10・12……SD23



第7図　D・E・F区　IIa・IV・V期出土遺物（1/4、15のみ1/3）

まとめ

今年度の調査成果を時期ごとに整理していく。

I期（弥生時代）

岩倉市の周辺は当該期の遺跡が、数多く見られ、注目されてきた地域であるが、その実態はほとんど判明していなかった。昨年度、及び今年度の調査において、住居と周溝墓が確認され、僅かながらではあるが、集落の一端を明らかにすることができた。

II期（古墳時代）

今回、古墳時代前半期の土器が遺構に伴って一括して出土した。これらの資料は、研究の立ち遅れている感のある尾張地方の古墳時代土器研究に、大きな影響を与えるであろう。

V期（鎌倉～室町時代）

井戸を検出したことによって、発掘区周辺に中世の集落が広がっていたと考えられる。

VI期（戦国時代）

幻の城とされ、実像がほとんど不明であった岩倉城であるが、3年間の調査によって、断片的ではあるが、現実に存在した城として語ることができるようになってきた。しかし調査区域は、岩倉城全体からみればほんの一部にすぎず、到底、全容を把握するには至っていない。今後、城郭のみならず、城下町の存在も含め、文献史料、地籍図の検討等、総合的な研究が望まれる。

（服部信博・金子健一）

池下古墳

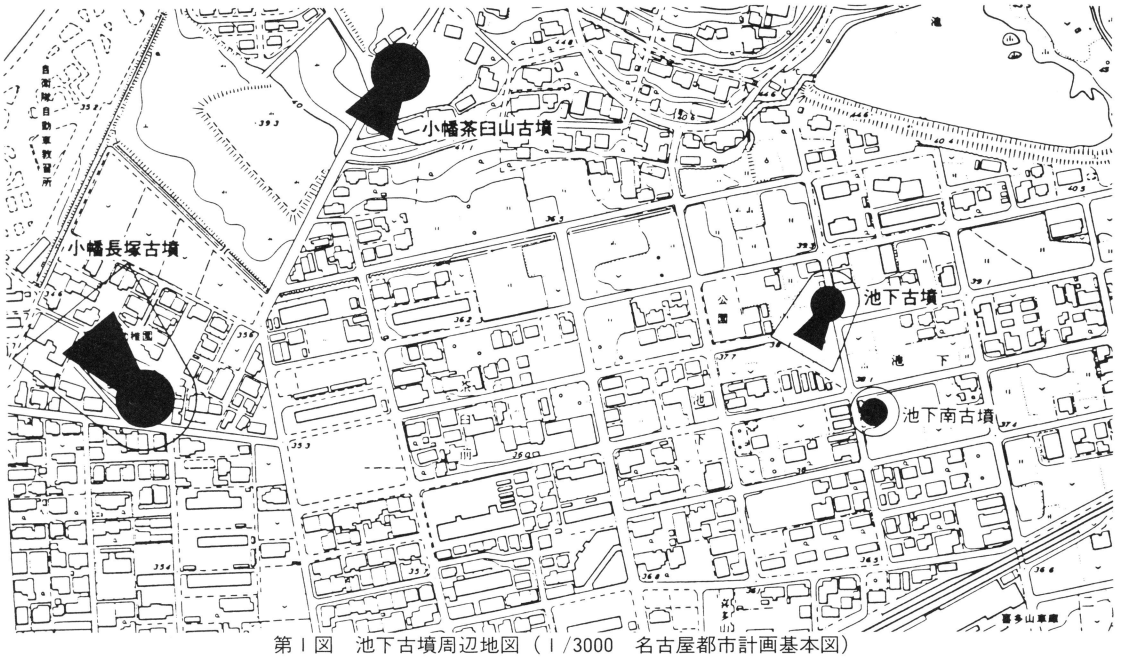
調査の経過

池下古墳は名古屋市守山区小幡字池下に所在する前方後円墳である。周囲には茶臼山古墳・長塚古墳などの前方後円墳があり、これらと共に小幡古墳群を形成している。古墳群は庄内川と矢田川にはさまれた小幡台地とよばれる洪積台地上に立地している。

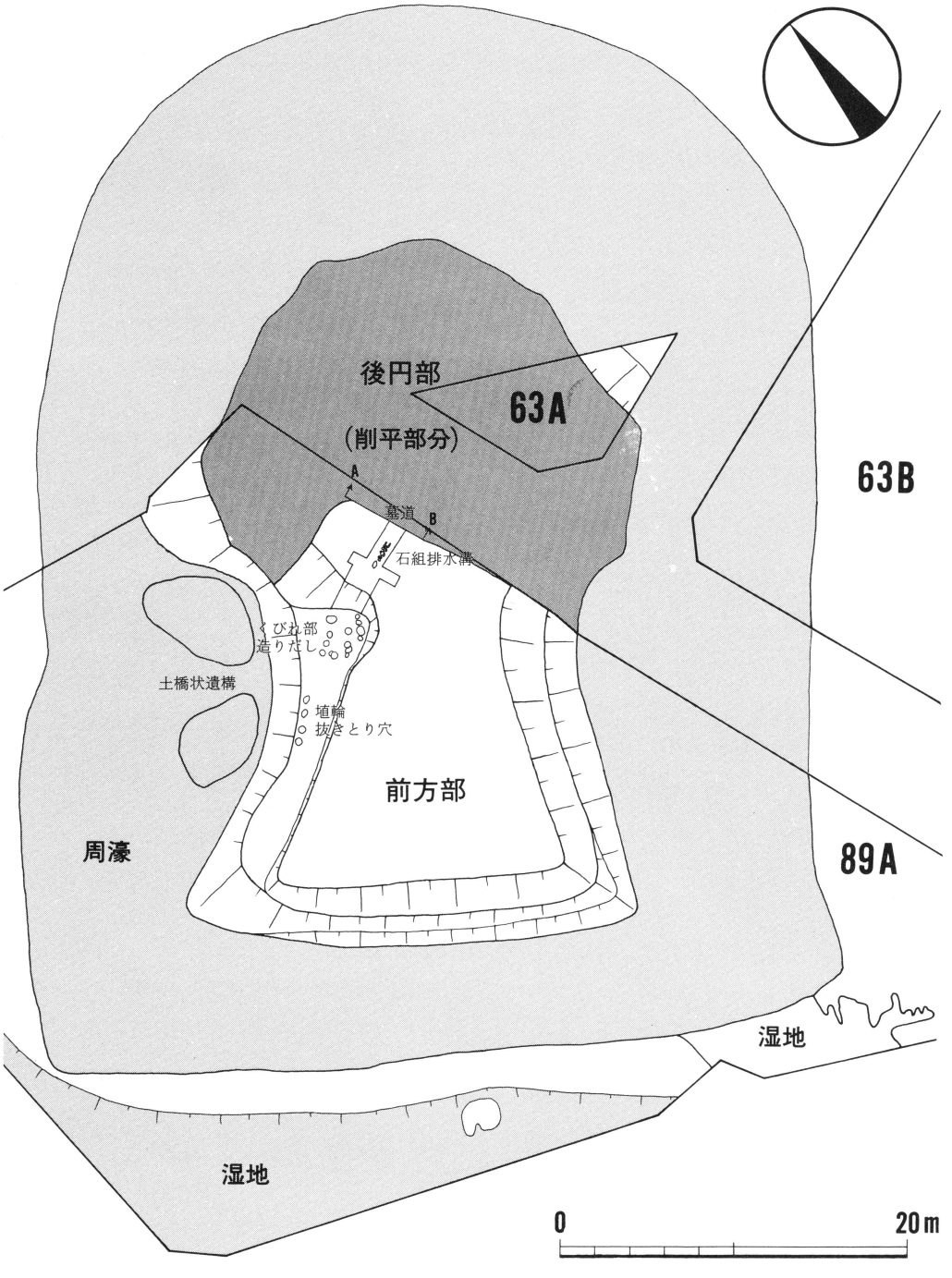
池下古墳は道路建設により昭和19年に後円部が破壊され、さらに昭和41年に一度発掘調査がおこなわれている。昭和41年の調査では円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪が墳丘裾をめぐり、くびれ部造りだしからは須恵器の甕・子持高杯・高杯、鉄鏃などが出土している。今回の調査は名古屋環状２号線の建設によるもので、昭和63年度より発掘調査をおこなってきた。昨年度の調査では池下南古墳（直径約18ｍの円墳）および池下古墳の後円部（63Ａ区）と周濠の一部（63Ｂ区）を検出した。本年度は池下古墳の後円部の一部と前方部そして周濠を調査した。(89Ａ区)。



池下古墳全景



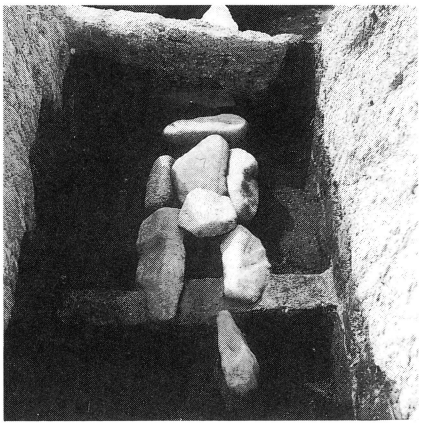
第Ⅰ図　池下古墳周辺地図（Ⅰ/3000　名古屋都市計画基本図）



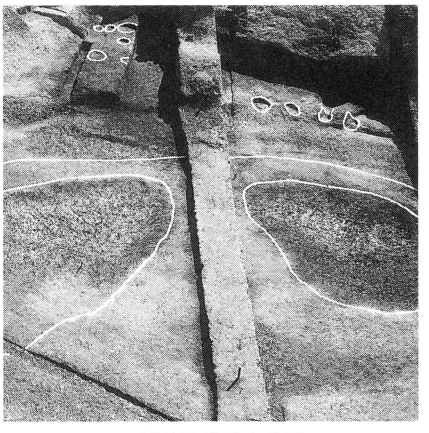
第2図　池下古墳遺構配置図

遺構　池下古墳は北側の丘陵から派生している低平な尾根の先端に、墳丘の主軸を尾根の方向に直交させて築いている。墳丘は地山を削りだして前方後円形の基底部を築き、そこから二段築成に盛土をほどこしている。規模は基底部ではかると全長約42m、後円部径約30m、前方部幅約26mである。周濠は墳丘の周囲を盾形にめぐる。きわめて浅く、底面のレベルが一定せずに南側では湿地に接しており、滞水の痕跡はない（第2図）。

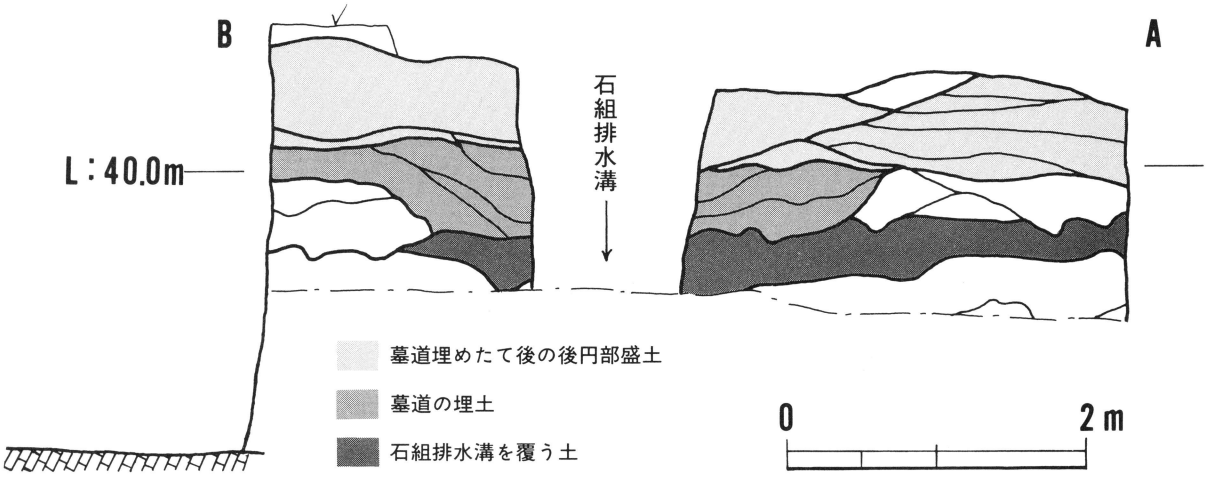
後円部の大半はすでに削平されているため、埋葬施設そのものは残っていないが、後円部の中心付近からくびれ部にむかって石組排水溝が遺存していた。この排水溝は暗渠で黒色の砂質土で覆われている。次に埋葬施設に付属するものとしては墓道の存在がある。後円部土層断面の検討により、石組排水溝を覆う黒色土の上に、浅くU字形に落ち込む土層を確認した（第3図）。埋土は後円部の盛土と共通する黄褐色の粘土で、なかに細かい土器片



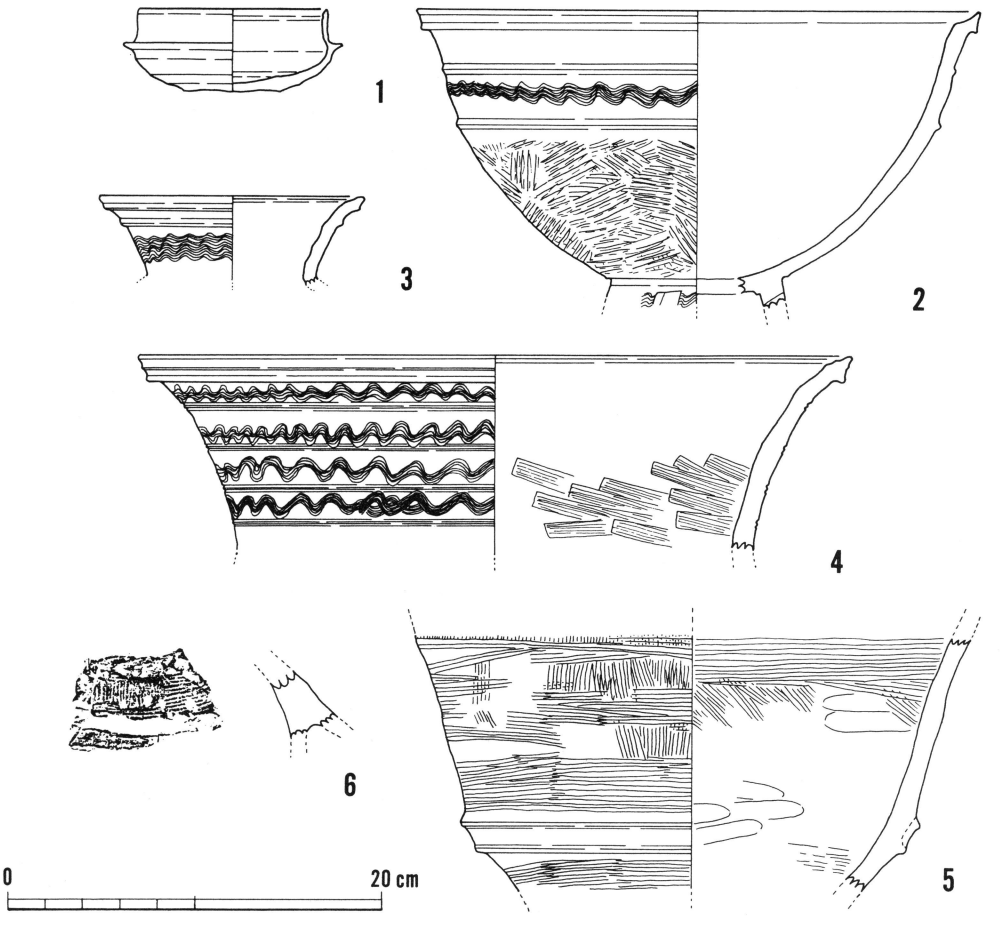
石組排水溝検出状況



土橋状遺構検出状況



第3図　後円部土層断面図



第4図　出土遺物実測図（1～4須恵器、5・6埴輪）

が多くまじっている。これは、横穴式石室の羨道部先端からさらに墳丘外へつうじる墓道とよばれる施設で、初期の横穴式石室にはしばしばみられる。池下古墳では、墓道を埋めたてたのち、さらに後円部の盛土がなされている。また、周濠内でくびれ部造りだし付近のみ一段深く堀りくぼめており、その中央を土橋状に削り残している。これは、周濠外と墓前祭祀がおこなわれた造りだしをつなぐ「道」のような施設と考えられる。

遺物　須恵器・埴輪などがある。須恵器は杯身(1)・器台(2)・壺(3)・甕(4)などで、埴輪は円筒埴輪のほかに朝顔形埴輪(5)・蓋形埴輪(6)が出土している。須恵器には尾張旭市城山2号窯の製品があり、年代的には5世紀末から6世紀初頭頃に属する。

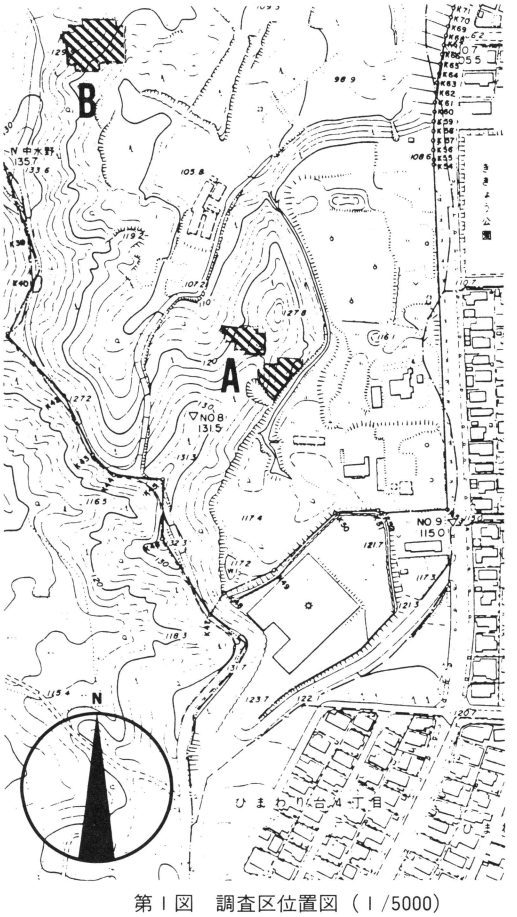
まとめ　茶臼山古墳が名古屋市教委の調査により、6世紀中葉に築造されたことがわかったため、池下古墳は小幡古墳群のなかで最も古い前方後円墳となった。また、墓道の検出により、埋葬施設は横穴式石室であったことが確定した。ゆえに、池下古墳は尾張で最古段階に属する横穴式石室墳のひとつであることがあきらかとなった。　（樋上　昇）

小田妻古窯跡群

調査の経過

小田妻古窯跡群は、瀬戸古窯跡群内の北西部、水野地区に位置し、水野川の南の低位丘陵上に立地する鎌倉時代の古窯である。この地域は、以前から陶片の散布地として知られ、昭和58・59年に実施された愛知県教育委員会による分布調査により、窯跡の存在が確認されていた。今回の調査は、住宅・都市整備公団による水野特定土地区画整理事業に伴う事前調査として実施されたものである。A・B2地区、約2000㎡の調査の結果、窯体6基・工房跡1ヶ所等を確認した。A・B両地区とも、窯体は分焔柱を有する窖窯である。

（日比　宰）



第Ⅰ図　調査区位置図（1/5000）



Aa区窯体全景



B区SY02・SY04

調査の概要

A区　A区は調査範囲が尾根の両側にまたがっているため便宜上2つにわけ、屋根の南東斜面をAa区、北西斜面をAb区とした。Aa区では窯体3基・工房跡1ケ所、Ab区では窯体1基を検出した。Aa区の灰原は下半分が後世の整地によって削平されていたが、窯体の残存状態はよく、なかには天井の一部が残っているものもあった。窯体はすべて分焔柱を有する13世紀頃の窖窯である。窯体の長さは10m前後で、最大幅は3mを超えるものが多い。工房跡はAa区の斜面の一端を掘り排水溝をめぐらせ、低部に盛土をして平坦面を造り出している。床面には多くのピット・生の粘土・炭・焼土やカマドらしきものがみられる。またピットの一つに灰白色粘土を充填したものがあり、重ね焼きした灰釉系陶器が正位置で埋められていた。それを取り除くと黄色の砂が詰まった径約10cmの穴がみつかった。おそらくこれはロクロピットと考えられる。

遺物は灰原から13世紀の灰釉系陶器椀・小皿・こね鉢が多量に出土している。また陶錘や陶丸もあるが、これら日常雑器に混って施釉陶器である灰釉四耳壺や火舎形香炉、他に窯の前庭部や工房跡から工人が煮炊きに使用したと思われる土師鍋・羽釜も出土している。

B区　B区では、丘陵の南東斜面に窯体2基・構築途中で放棄された窯2基・炭焼窯1基等を検出した。窯体のうち1基は後世の整地によって上半分を削平されていたが、もう1基と灰原は完存していた。窯体は形状・規模ともA区と同様に、分焔柱を有する窖窯で長さ10m前後・最大幅3m程度のものである。構築途中で放棄された窯は、SY03は焚き口部分のみを掘り、分焔柱の脇を少し掘りかけた状態で中止して後に粘土だめに転用している。SY04は分焔柱の脇を掘りぬき、焼成室を掘削してやめている。炭焼窯は楕円形のプランを有するもので、床面には炭が残っていたが出土遺物はほとんどなく、また灰原末端に位置しているため、年代や窯体との関係は不明である。

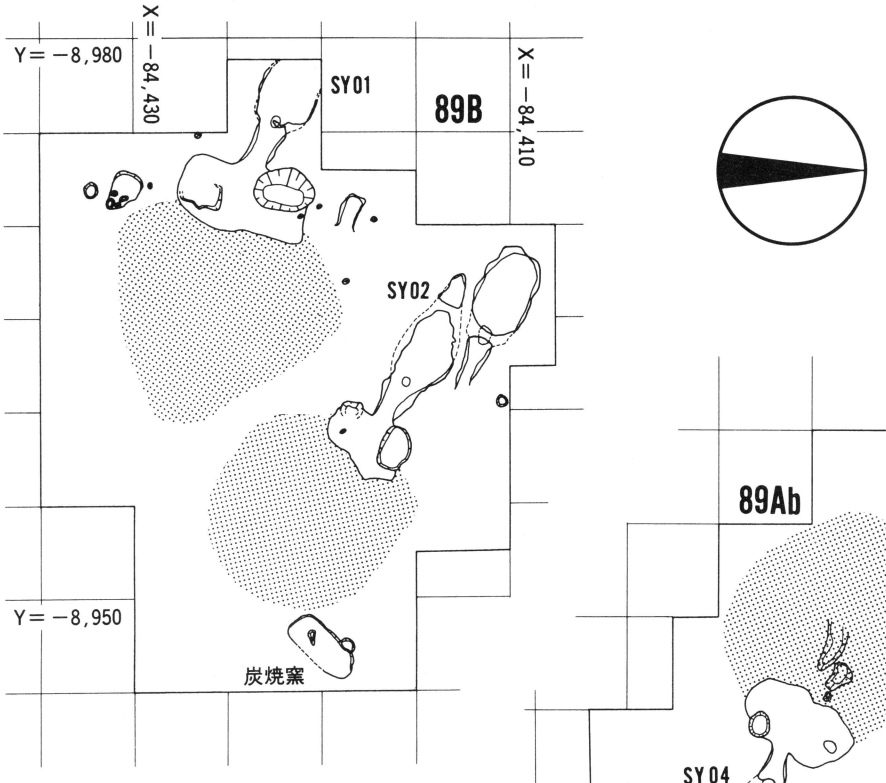
遺物は灰原から13世紀中の灰釉系陶器椀・小皿や陶錘・陶丸が、また窯の前庭部から工人が煮炊きに使用したと思われる土師鍋・羽釜が出土している。　（山口　昌直）



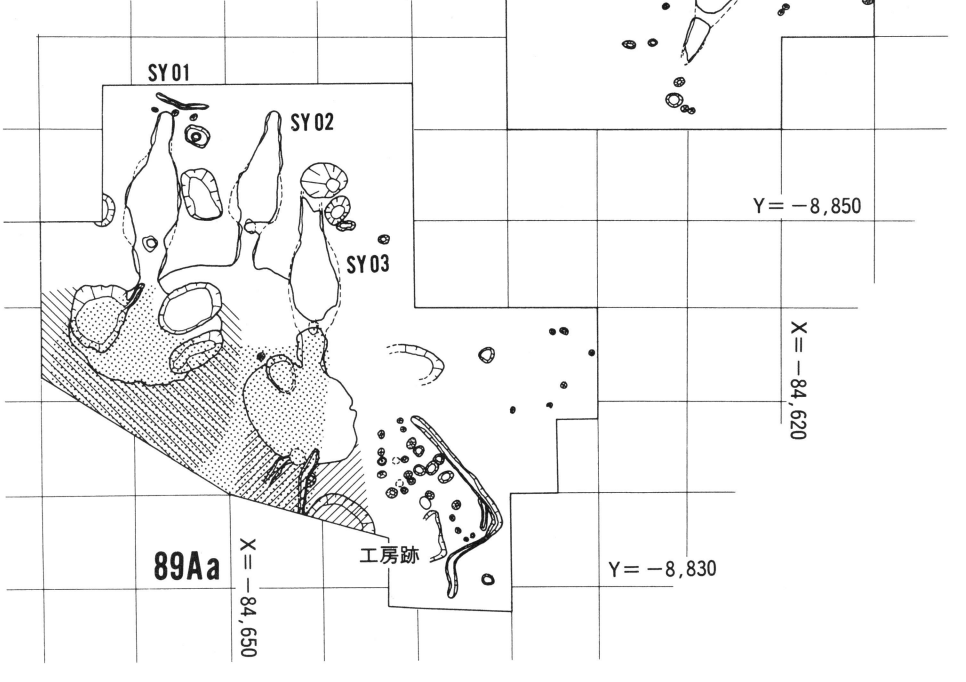
Aa区SY01



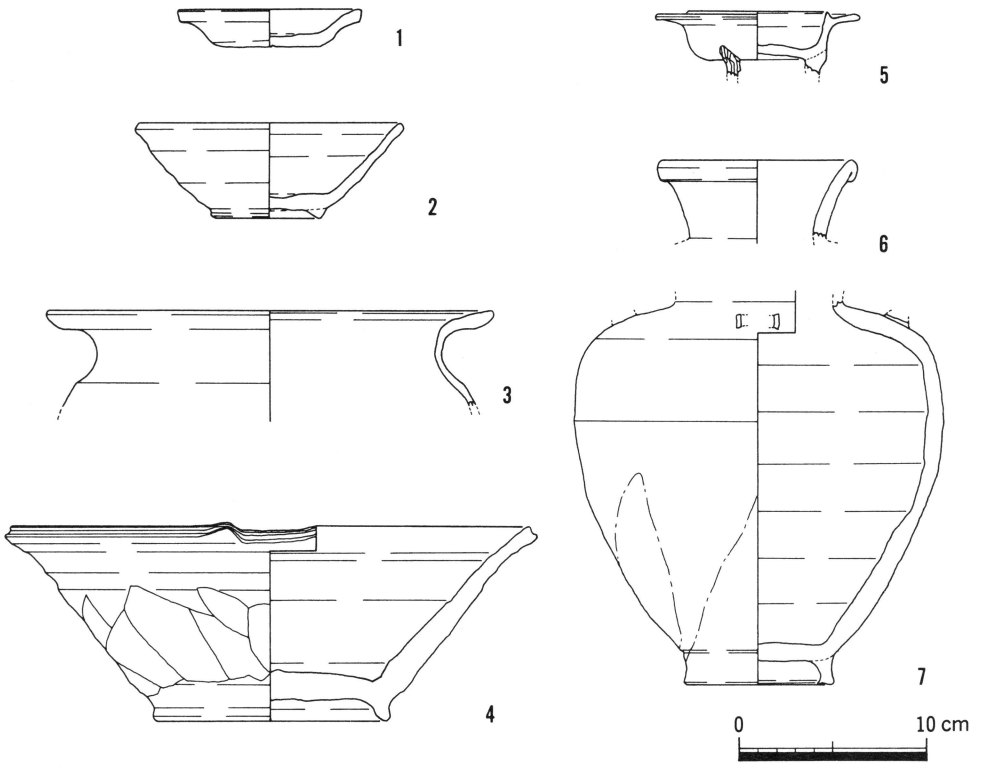
Aa区ロクロピット



第２図　Ｂ区遺構図



第３図　Ａ区遺構図



第４図　出土遺物（１．Aa区SY01焚口遊離、２・４～７．Aa区灰層、３．Ｂ区SY01前庭埋土）

まとめ

調査の結果、様々な新しい知見が得られた。そのなかでいくつかを取り上げてみる。

遺構の面ではＡ区の工房跡とロクロピットの発見があげられる。工房跡にはカマドのようなものや炭化物が発見され、ある時期に製作者たちの生活の場となっていた可能性もある。ロクロピットには重ね焼きされた灰釉系陶器が詰められ、その上に粘土をかぶせて覆っている。これは製作者たちが工房を放棄する段階でロクロピットを埋めたのか、しばらく使用しないとき次にまた使えるように保護する意味で粘土をで覆ったのか大変興味深い。また、Ｂ区で掘かけの窯が２基見つかっている。それぞれ中止された段階が違い、窯の構築方法を知る上で一つの好資料となるであろう。

遺物の面では灰層から出土した灰釉四耳壺の問題があげられる。灰釉四耳壺は二十数点出土しているが、灰釉系陶器と一緒に焼いていたのか再利用したものなのかはっきりしない。再利用した痕跡のないものが多いところから、併焼した可能性は高い。灰層の最下層からは12世紀にさかのぼる胎土の精良な灰釉系陶器や香炉も出土しており、四耳壺との関連を検討しなければならない。また、12世紀代のいわゆる“均質手”の灰釉系陶器が水野地区でも焼かれていたということは注目される。　（城ヶ谷和広）

岡島遺跡

調査の経過

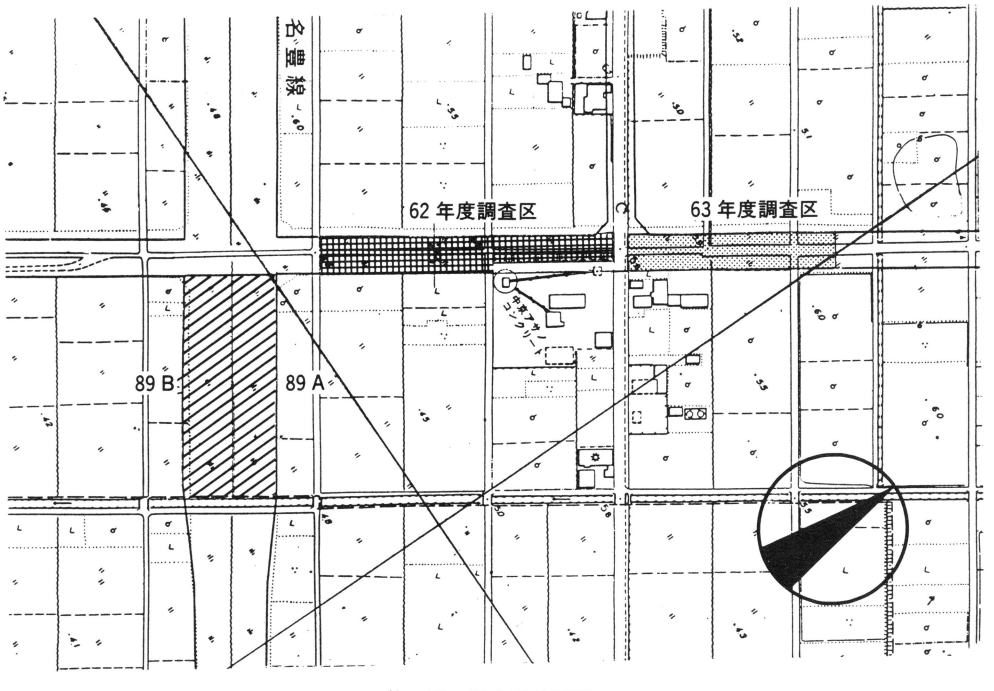
岡島遺跡は、西尾市岡島町・江原町に所在する弥生時代を中心とした遺跡である。遺跡は矢作古川左岸の自然堤防上に立地する。付近を矢作古川のほか広田川などが流れており、これらの河川やその支流が頻繁にその流路を変えて流れ、非常に不安定な地形であったことが想定される。

昭和62・63年度は県道蒲郡・碧南線に伴う調査であったが、今年度は、国道23号岡崎バイパス建設に伴うもので、調査区をＡ・Ｂの２区に分けて実施した。

遺跡の現地表面の標高は約4.5ｍである。今回の調査では、表面の耕作土を約50㎝下げると、その下に厚さ約20㎝の古墳時代以降の遺物を含む黒褐色土が堆積する。この下が最初の遺構面（上面）で、標高3.8～4.0ｍを測る。この上面から20～30㎝の間層を経た後、弥生時代中期の遺物包含層が厚さ約50㎝堆積する。この下が第二の遺構面（下面）で、標高は3.2～3.4ｍである。（山田　基）

調査の概要

今回の調査区は、遺跡範囲の南端部に該当し、遺構は希薄であったが、調査区内に限れ



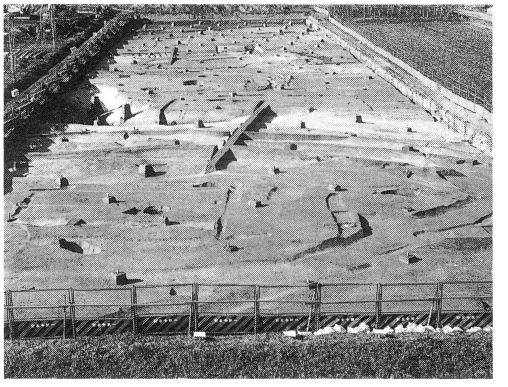
第１図　調査区位置図

ば、西から東に向かって遺構・遺物の密集度が増す傾向が認められた。

以下、上面及び下面の遺構・遺物について、先に調査を終えたA区を中心に述べる。

上面　遺構は、数十条の溝と20数基の土坑を検出した。しかし、これまでの調査と同様に遺物は乏しく、ほとんどの遺構について時期を特定するには至らなかった。ただ、南北方向の溝１条と、自然流路の可能性も考え得る東西方向の溝１条からは、古墳時代前期の土器が出土した。特に後者は、壺と甕との一括出土例として好資料である。

下面　遺構は、方形周溝墓・土器棺墓・溝・土坑及び「土器集積遺構」である。方形周溝墓は数基が確認され、周溝の全形を知り得たものの規模は約12×11.5mで、溝中から弥生中期の壺類を出土した。土器棺墓はA区だけで十数基あり、全てが壺で、ほとんどが正立の状態である。「土器集積遺構」は、自然流路の肩部付近で検出した。断面観察によっても、埋置の状況は確認されず、平坦面に「立て並べられた」ものと推定される。器種構成は、小型壺と脚付壺を中心に「台付鉢」を加えたもので、弥生後期に属する。その他の遺物としては、銅鏃が土坑内から出土した。



A区上面全景（東から）



A区自然流路と溝群



土器集積遺構

まとめ

本年度調査による新知見は、方形周溝墓と土器棺墓群の検出で、これにより弥生中期の当遺跡での「墓域」が推定されるところとなった。また、土器棺墓で、所謂古井式と長床（高蔵）式の壺が蓋と身の関係で組み合わさって出土したことは、土器の編年研究の上で注目された。

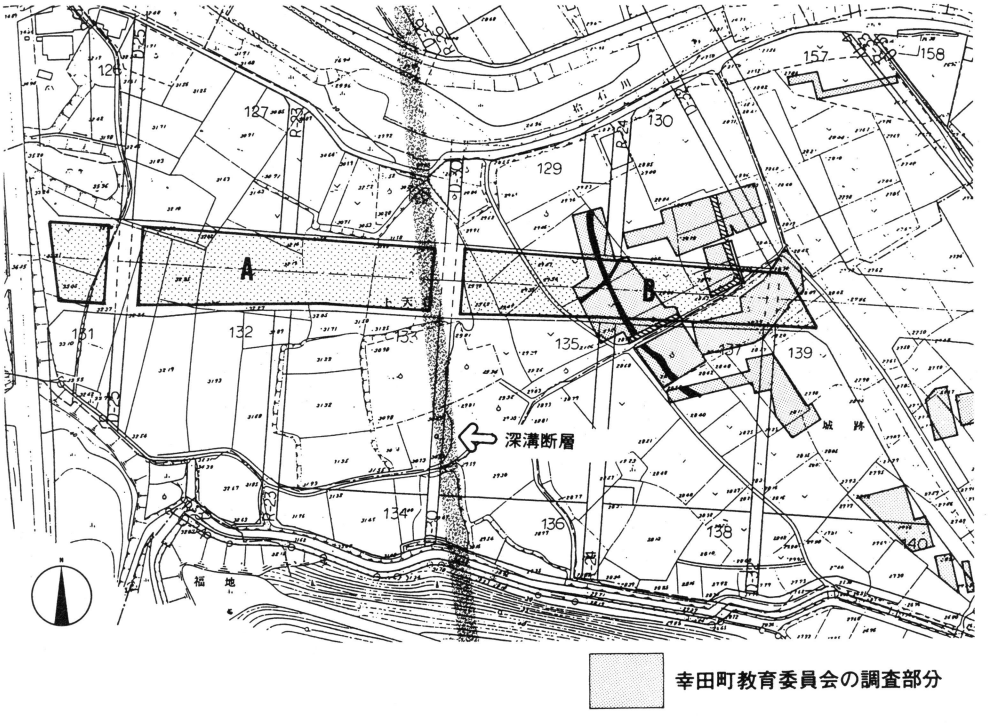
（福岡晃彦）

東光寺遺跡

調査の経過

東光寺遺跡は、額田郡幸田町大字深溝字上天白、字天白、及び字城跡にかけて所在する。この地区の県道蒲郡碧南線と同安城蒲郡線建設に伴い、愛知県土木部の委託を愛知県教育委員会が受け、当埋蔵文化財センターが今年度より調査を実施した。遺跡は、遺跡地図には、記載されておらず、県道建設に付随して行われた圃場整備に先立つ幸田町教育委員会の試掘調査によって確認され、昭和61年度から63年度にかけて６次にわたる発掘調査が同教育委員会によって行われている。この調査では、縄文時代から中世までの時期の遺物が出土し、主要な遺構としては、弥生時代及び中世の溝などが検出されている。これに基づき、今回の調査は、蒲郡碧南線の安城蒲郡線との交差地点より西側部分について２地区に分割して行った。(第１図)

遺跡は、美濃・三河山地の一部の東の遠峰山の山塊と西の三ケ根山の山塊の山挟部を流れる拾石川右岸に位置し、洪積台地の中位段丘面に立地する。標高は、調査区西半の89Ａ区で30～32m、東半の89Ｂ区で27～28mである。遺跡の南と西は三ケ根山の山塊によって、



第１図　調査区位置図（１/2500）

東と北は拾石川によって画される。調査区は、調査前は畑地で、西の拾石川に向かって若干傾斜する平坦な地形であるが、A区とB区の境界部は、深溝断層の影響で比高約2mの急傾斜地である。周囲は、近年までは畑地及び果樹園であったが、圃場整備によって区画された畑地となっている。

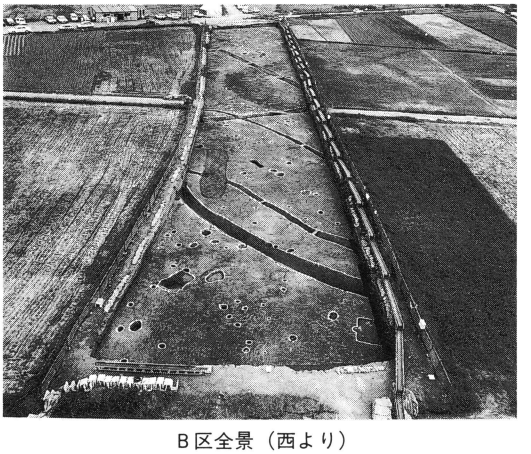
調査の概要

遺跡の基本層序は、1．灰褐色土(耕作土)　2．褐色土　3．暗褐色土で、深さ0.6m～1mで基盤の黄褐色砂礫土に至る。遺構の検出は、黄褐色砂礫土の上面で行った。検出された遺構と遺物は、Ⅰ：縄文時代晩期　Ⅱ：弥生時代後期　Ⅲ：奈良時代　Ⅳ：中世に大別される。以下、各時期の概略について述べる。

Ⅰ期：　Ⅰ期は、Ⅰ－1期とⅠ－2期の2時期に分けられる。Ⅰ－1期は、晩期中葉で、主な遺構としてはA区SD01とSK01がこの時期に属す。SD01は、溝状の窪地で、ほぼ南北にのび、幅7.2m　深さ0.5mを測る。埋土は、黒色土で多量の有機物を含む。SD01及び、これよりやや新しい時期のSD02の埋土中より東三河地方で稲荷山式土器として型式設定されている土器群が出土した。土器の他は、石製品では、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、石錐、浮き、石棒、石冠が出土し、土製品としては、土偶、土錘などが検出された。Ⅰ－2期は晩期後半で、東三河地方の馬見塚式土器から水神平式土器の時期に併行する時期である。A区の中央部に比較的集中して、土坑群が検出された。また、A区西半で樫王式土器から水神平式土器の時期の土器棺墓5基が検出された。



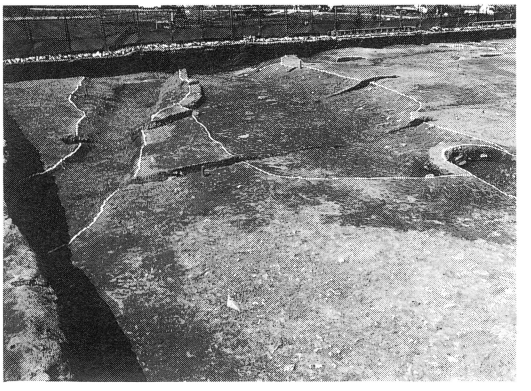
A区全景（東より）



B区全景（西より）

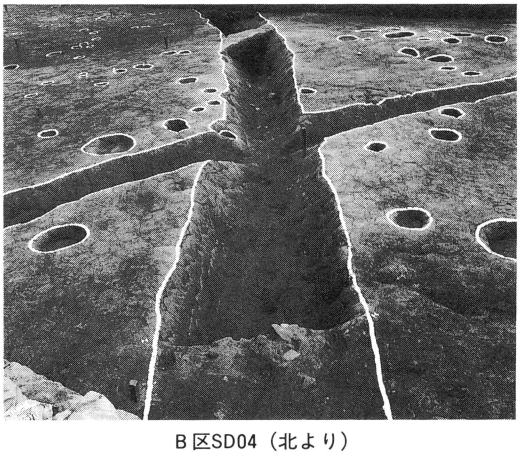
Ⅱ期：　この時期の主な遺構としては、溝4条、方形周溝墓1基があり、全てB区で検出された。SD01・02・03は、北東から南西の方向であるのに対して、SD04はこれと異なり、北西から南東の方向である。規模に関しては、SD01・04は、検出面において幅2～2.4m　深さ1～1.2

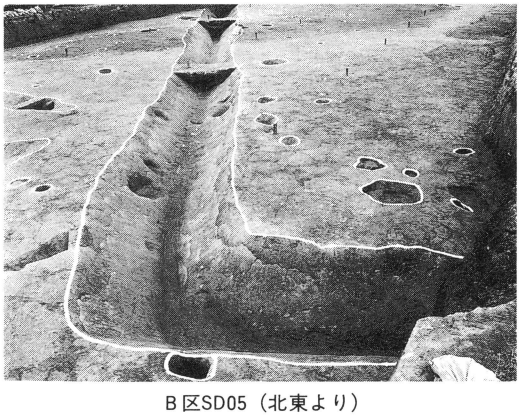
m　断面Ｖ字形、SD02・03は、幅１～1.2m深さ約0.6m　断面Ｕ字形である。SD01の埋土中より、欠山式土器が多量に検出された。SD03と04は、幸田町教育委員会の調査が既に行われており、SD04から後期の土器が多量に出土している。SZ01は、北西部に陸橋が一つある型式の周溝墓で、掘形は浅く、遺物はほとんど検出されなかった。ゆえに時期を確定しえなかったが、形態よりII期に属すものと考えられる。


A区SD01・02（南より）

III期：　B区で竪穴住居１軒が検出された。(SB01) 南半は調査区外で、東西2.2m検出面より深さ0.2mで床面となる。北辺中央に焼土が検出され、竈と考えられる。床面より、須恵器杯、土師器甕が出土した。

IV期：　IV期は、IV－１期の中世前半(13～14世紀）とIV－２期の中世後半（15～16世紀）の２時期に分けられる。IV－１期は、A区東半に土坑群が検出された。小形の土坑の大部分は、掘立柱建物の柱穴と考えられるが、明確に柱穴として並ぶものはなかった。また、埋土中より焼土、炭、人骨が出土した細長い土坑が２基検出され、火葬に関係するものと考えられる。A区の竪穴住居SB01～03は掘形が浅く、検出面より数cmで床面に達する。SB01は、東西3.4m　南北3.6m　SB02は、東西3.8m　南北3.8mで、SB01は北西隅に竈をもつ。これらの竪穴住居は、遺物がほとんど検出されなかったが、この時期に属すと考えられる。II－２期は、溝１条が検出されている。SD05は、検出面で、幅２m　深さ0.8m　断面は緩い傾斜のＶ字形からＵ字形である。埋土中からの出土遺物は少なく、15世紀から16世紀


B区SD04（北より）


B区SD05（北東より）

前半の陶器類、土師器が検出された。

他の時期の遺構としては、A区の東半部に近世の土葬墓と考えられる土坑が3基検出され、埋土中より人骨が出土した。また、同地区に直径約5m、深さ0.3mで、底部分に径30cm程の礫が投棄された状態で多量に出土した近世以降の時期の土坑を検出した。

まとめ

Ⅰ－1期とした縄文時代晩期中葉の土器資料については、宝飯郡小坂井町稲荷山貝塚の明治大学による調査によってほぼ同時期の土器群が検出され、稲荷山式土器として型式設定されている。また、同時に調査された豊川下流域の遺跡群の縄文時代晩期中葉から後葉にかけての土器の編年研究によってその位置付けがなされている。東光寺遺跡は、東三河に近接した地域にあるが、西三河における同時期の資料として、編年的な位置付けと地域的な型式差を検討することが、今後の課題である。

Ⅱ期については、弥生時代後期の溝4条が検出され、その内3条は、ほぼ同方向に走り規模及び形状から集落を廻る環濠の可能性が大きい。集落の中心はB区の東方向と推測され、小土坑が検出されているが、竪穴住居などの建物は確認されていない。方形周溝墓は1基検出されたが、細かい時期を決定できず、予想される居住域との時期及び位置的な関係は今後の調査に寄るところが大きい。

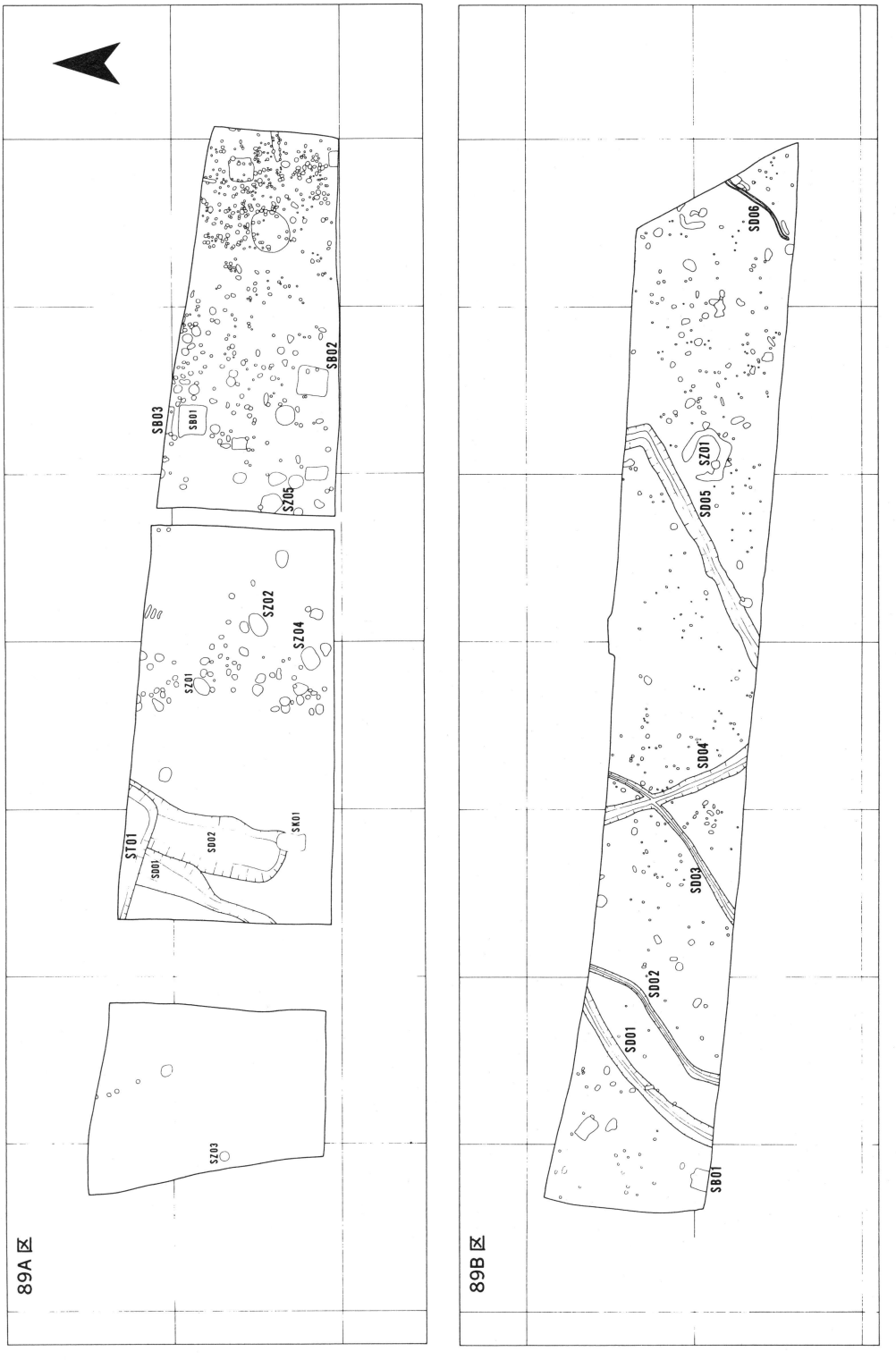
Ⅳ期には、A区の東半部に掘立柱建物と推測される柱穴が集中し、竪穴住居、火葬施設及び方形土坑などが検出されることから、中世の屋敷地と推定される。しかし、この時期に多くの場合認められる屋敷地を区画する溝などは確認されず、問題となる。Ⅳ－2期の溝は、室町時代後半に属し、復元した場合、地方豪族の居館に付随する堀程度の規模である。付近には、天白、城跡、裏門など中世の城郭に関連すると推測される地名が残存する。しかし、溝以外に城郭を構成する施設の遺構は確認されず、中心部と考えられる地区の今



A区SZ02　土器出土状態（南より）



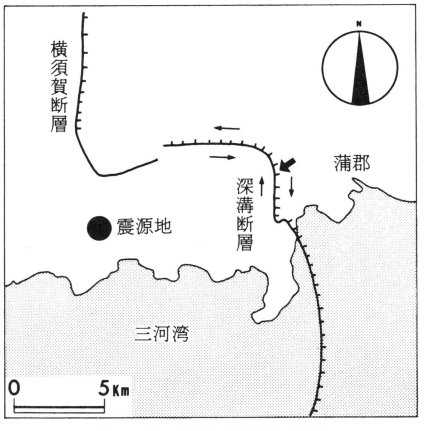
A区SB01　遺物出土状態（北より）


89A区
SB03
SB01
SB02
SZ05
SZ02
SZ04
SZ01
ST01
SD01
SD02
SK01
SZ03
89B区
SD06
SZ01
SD05
SD04
SD03
SD02
SD01
SB01

第2図　遺構図（1/800）

後の調査によって明らかになるものと予想される。

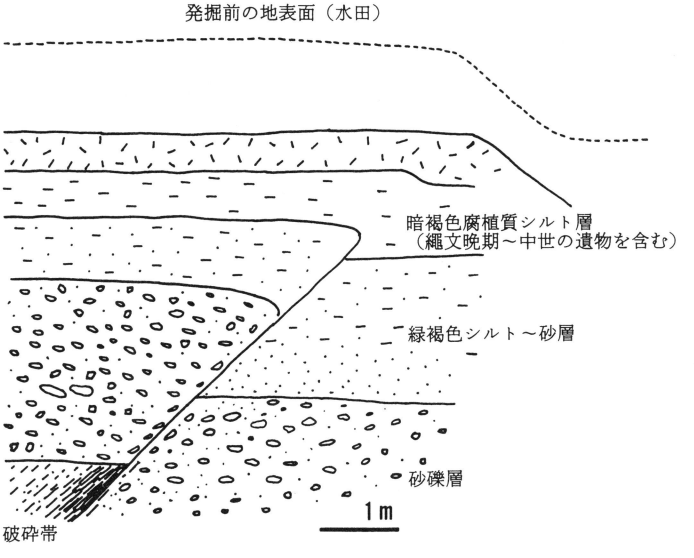
今回の調査では、A区の東端部をほぼ南北に横断する深溝断層を調査の対象とした。(第1図) 1945年1月幡豆郡幡豆町付近を震央として三河地震 (M7.1) が発生し、三河地方を中心に大きな被害をもたらし、これによって横須賀断層と深溝断層が形成された。(第3図) トレンチによって深溝断層の断面を調査したところ、中位段丘の洪積層に逆断層が確認され、近年の他の調査と同様の結果が得られた。(第4図) (酒井俊彦)



第3図 深溝断層位置図



深溝断層断面 (南より)



第4図 東光寺遺跡トレンチ断面における深溝断層の露頭スケッチ

森岡（もりおか）遺跡

位置と経過

森岡遺跡は豊橋市森岡町に所在し、豊川左岸の南北に延びる河岸段丘上に位置する。標高は24mを測り、調査区北側には豊川支流の神田川・三輪川による浸食谷が展開している。本遺跡の立地する段丘上にはいくつかの遺跡がみられ、調査区北側に弥生後期の高井遺跡、西側に古墳時代の集落が確認された浪ノ上遺跡があり、さらに周辺には当遺跡も含め、馬越北山古墳群、瀬戸古墳群等群集墳も多く存在する。今回の調査は東三河環状線建設に伴う事前調査として実施したもので、調査面積は1000㎡である。

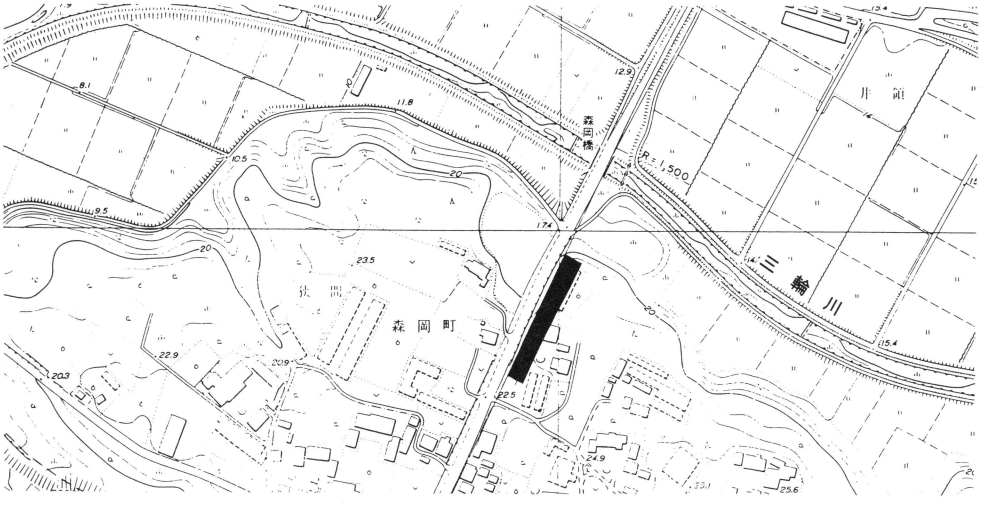
調査の概要

調査区の基本層序は、Ⅰ：旧耕作土、Ⅱ：灰褐色土、Ⅲ：黄白色土（基盤）である。しかし、果樹栽培や宅地造成のための削平、攪乱をうけており、遺構の遺存状態は必ずしも良好ではなかった。古墳の有無を主眼として調査を行った結果、四時期に大別しうる遺構・遺物を検出した。以下時期ごとにその概略を述べていく。

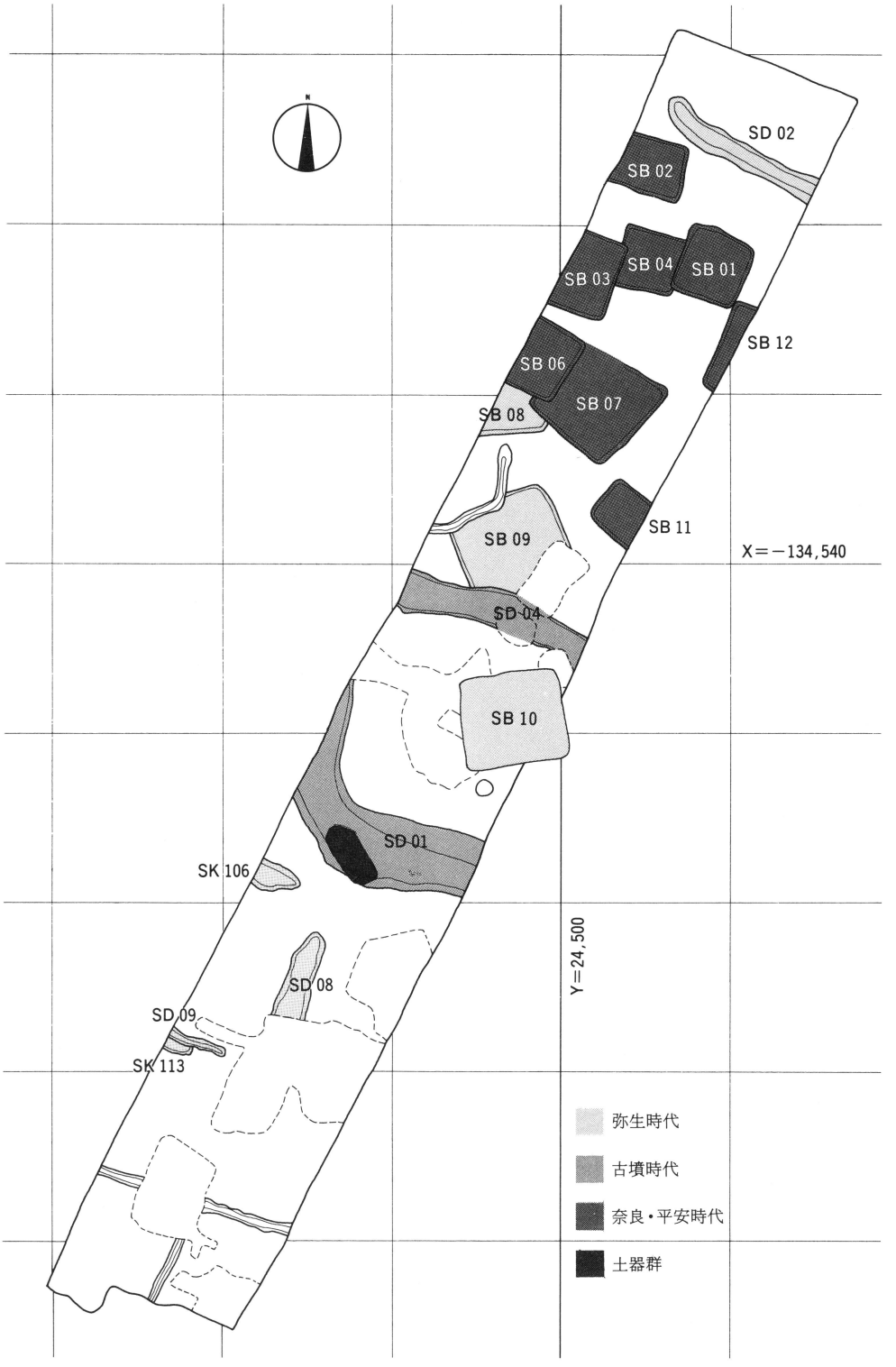


調査区遠景

弥生時代（中期）　竪穴住居３軒、溝、土



第Ⅰ図　調査区位置図（Ⅰ/5000）



第 2 図　遺構配置図（ I /400）

坑を検出した。竪穴住居はいずれも掘肩が浅く、周溝・柱穴等は不明瞭であった。規模は一辺５～６ｍを測る隅丸方形で、方位を北西に振る。SB10に関しては、攪乱により規模等一切不明であるが、一括遺物の出土（第３図－７・８）、炉跡と思われる焼土塊の検出により住居跡と認定した。溝、土坑では、方形周溝墓の可能性をもつSD08－SK106－SK113（SD09）が注目される。いずれの遺構からも弥生時代中期の遺物が出土している。

古墳時代　主な遺構・遺物として、一辺15m程度の方墳を想定しうる溝２条とそこから出土した一群の土師器をあげることができる。SD01は幅４ｍ、深さ40cmを測り、調査区中央で北へＬ字状に屈曲する。この溝と同時期と思われるSD04は、幅約２ｍ、深さ20cmで、後世の削平により溝の底部のみが遺されていた。主な遺物はSD01から出土しており、土師器を中心とし、個体数にして100個体を越える。器種としては土師器の甕がその大半を占め、次いで壺、高杯、さらに甑や若干の須恵器がみられる。時期はおおむね六世紀前半代と思われる。出土状態は溝の屈曲部に二つのブロックに分けて、意図的に配置された感があり、単なる一括投棄とは考えにくい。また、甕・壺・高杯がセット関係で重ね置きされていたことも想定される。但し、土師器、須恵器ともに、成形・焼成の不良なものが多く、器面の磨滅も著しい。（第３図－４・５・６）

奈良～平安時代　竪穴住居が８軒検出された。一辺３～５ｍの方形をなし、方位を北東に振っている。住居北壁中央に焼土塊を伴うものが３軒（SB01・02・07）あり、カマドを設けていたと思われる。出土遺物は土師器甕、灰釉陶器皿が中心である。（第３図－１・２・３）

鎌倉時代　伊勢型鍋、灰釉系陶器が出土した土坑を検出した。

まとめ

今回の調査において直接的には古墳を確認することはできなかった。しかし、SD01より



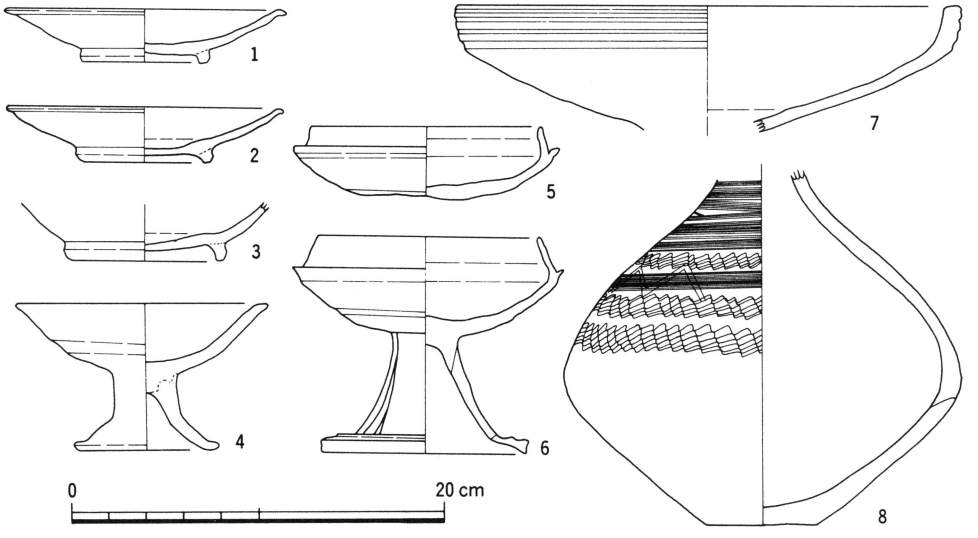
調査区全景（北より）



調査区全景（南より）

出土した一群の土器は従来研究の空白の観のある東三河地方の6世紀前半代の土師器の編年研究及び、(古墳とすれば) 葬制研究の上で貴重な手掛りを与えるものと考える。

(川井啓介)

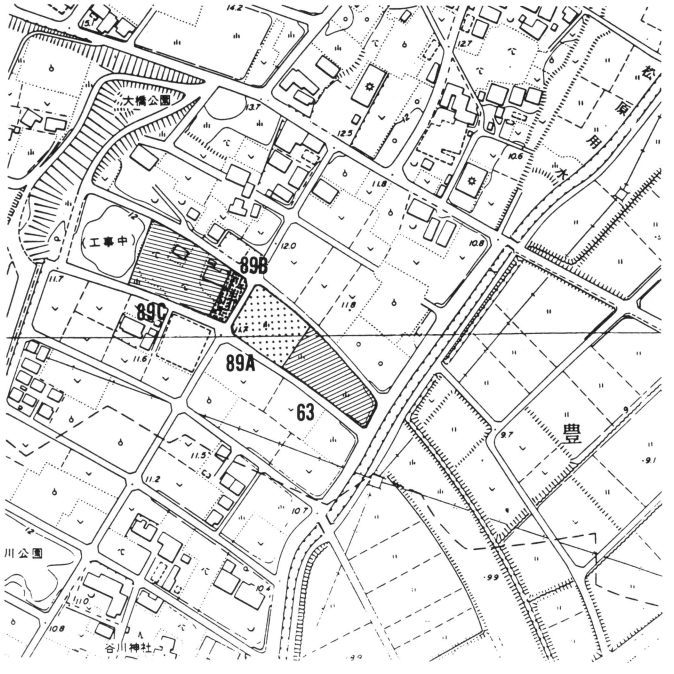


第3図　出土遺物（1/4）



SD01　遺物出土状態

麻生田大橋遺跡（あそうだおおばし）



第Ⅰ図　調査区位置図（1/5000）

調査の経過

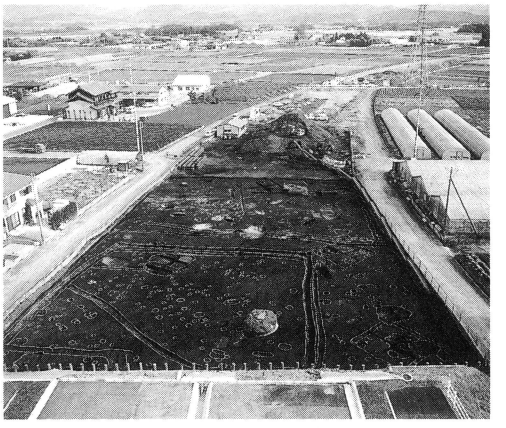
麻生田大橋遺跡は、東名高速道路豊川インターチェンジの南約500mの豊川市麻生田町大橋に所在する。遺跡は、豊川右岸の洪積台地（幅500mほどで、南北に細長くのびる）の東端に位置する。この台地は、標高約11～12mの豊川の低位段丘であり、現在は、大部分が畑地で、果樹園・ビニールハウス・宅地等に利用されている。遺跡の西側には、豊川の市街地をのせる中位段丘が展開し、比高は10mである。この段丘上には、上野古墳群・円福寺古墳群が築かれている。また、遺跡の東側は、松原用水をはさんで沖積低地がひらけ、水田が営まれており、低位段丘面との比高は、2.5mを測る。

当遺跡は、昭和12年頃発見され、市道北側に所在する麻生田当貝津遺跡（縄文時代中期から晩期後葉）と合わせて麻生田遺跡と総称されてきた。豊川市教育委員会では、大橋地区の区画整理事業に伴う事前調査として、昭和52年から平成元年にかけて、13次にわたって発掘調査を実施している。調査面積は、総計約5000㎡である。調査の結果、麻生田大橋遺跡は、縄文時代晩期後葉、古墳時代、中・近世にかけての複合遺跡であることが確認された。とくに、縄文時代晩期後葉から弥生時代初頭にかけての土器棺墓の検出が100例を越え、縄文時代から弥生時代への推移を究明するのに重要な資料を提供する遺跡として注目されるようになった。

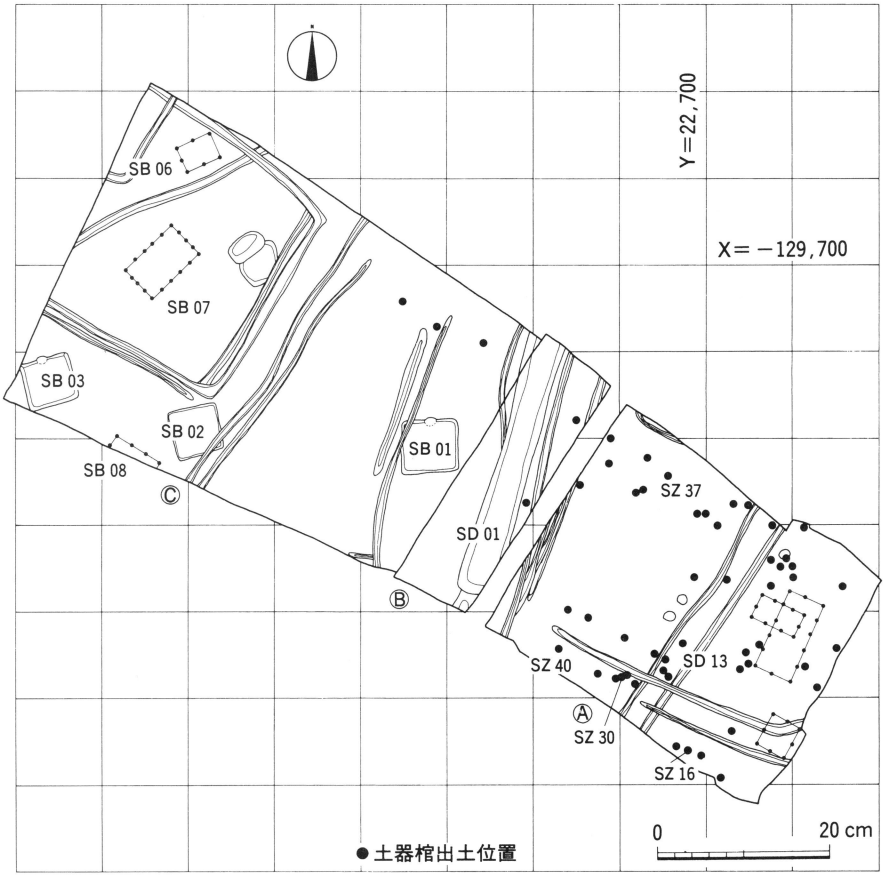
今回の発掘調査は、県道東三河環状線の建設工事に伴う事前調査として、昭和63年度に引き続き実施されたものである。本年度は、４月と11月の２期に分けて、Ａ・Ｂ・Ｃ３地区の調査を実施した。



A区　全景（東から）



C区　全景（西から）



第2図　遺構配置図（1/800）

調査の概要

調査区の基本層序は、上層から、表土・耕作土→黒色土（豊川右岸地域に特徴的ないわゆる黒ボク土）→明黄褐色土・黄灰褐色砂礫土（基盤）の順である。遺構は大部分が黒色土層から掘り込まれているが、木・竹の根や耕作等による攪乱がひどく、黒色土内での検出は困難で、明黄褐色土の上面（黒色土の浸透層）で検出せざるをえなかった。

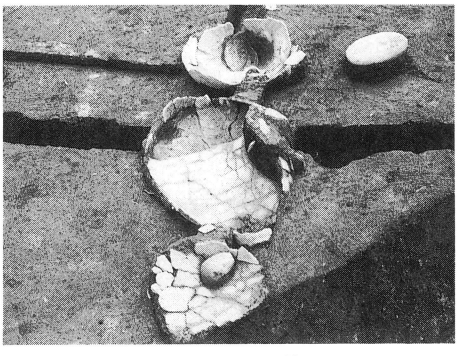
今回の調査で検出された遺構・遺物は、縄文時代晩期後葉から弥生時代初頭（Ⅰ期）、古墳時代後期（Ⅱ期）、中・近世（Ⅲ期）の３つの時期に大別できる。以下、各調査区ごとにその概要を述べる。

Ａ区

Ⅰ期　土器棺墓51基・袋状土坑４基を検出した。残存状態が悪く、完形に近い形で検出されたものは数個体にすぎない。遺構の掘方もわからないものが多く、明確な掘方を検出したものから推測すると、棺身の土器より少し大きめの穴を掘り、片側の立ち上がりにぴったり寄せ、横ないし斜めにねかすように土器を入れている。今回、立位の土器棺墓は検出されなかった。埋葬の方法は、単棺もあるが、深鉢・甕の底部や鉢で蓋をしたものも多い。土器棺に使われた土器の器形には、甕・壺・深鉢があり、縄文時代晩期後葉からの五貫森式～水神平式にかけての突帯文系・条痕文系に属する時期のものである。土器棺墓は、調査区西側中央部を除き、ほぼ全域にわたって分布するが、樫王・水神平式のものが全域にあるのに対し、古い時期の五貫森・馬見塚式



Ａ区　SZ16出土状況



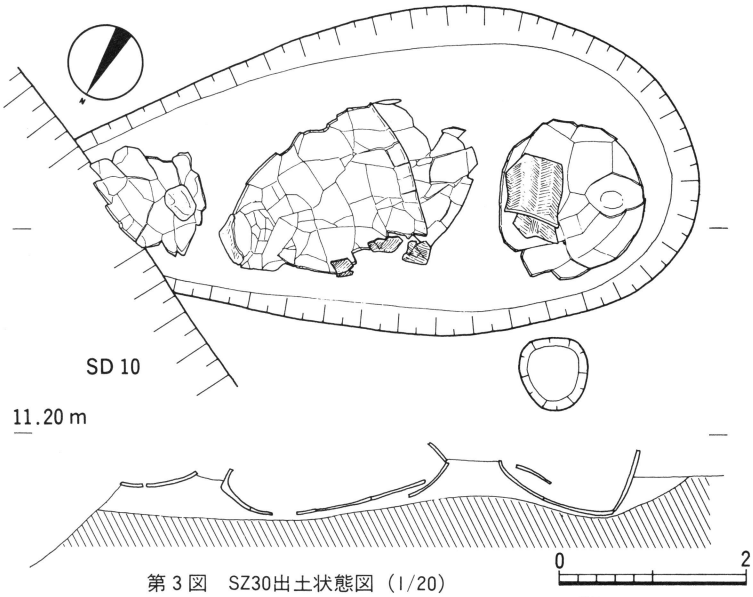
Ａ区　SZ30出土状況



Ａ区　掘立柱建物群



Ａ区　SD13遺物出土状況



第３図　SZ30出土状態図（1/20）

のものは北側に集中する傾向がある。袋状土坑は、径1.2ｍ、深さ１ｍほどの円形の土坑で、底部が外に開き袋状をなす。埋土内からは、少量の縄文土器片が検出されたのみで、貯蔵植物等の痕跡は認められなかった。

Ⅲ期

掘立柱建物３棟、溝状遺構10条、土坑多数を検出した。掘立柱建物は、１間×３間、２間×５間、２間×２間の大きさで、調査区東側の溝状遺構に区切られた方形の区画内に、溝とほぼ同じ方向で建てられている。溝状遺構は、東側と西側の２群に分かれ、２本１セットとなり、群ごとに一定の方向を指向している。何らかの区割りを示す遺構だと思われる。土坑の中には、1.6×0.8mの隅丸長方形のプランを持ち、土師質の皿・近世陶器等に混じって人骨が検出された墓拡を思わせるものや、径１ｍほどの円形とした掘り込みの中に多数の礫や中世の灰釉系陶器が入ったものもある。



Ｂ区　全　景（北から）

Ｂ区

Ⅰ期　土坑棺墓２基を検出した。樫王・水神平期の蓋をもつタイプである。

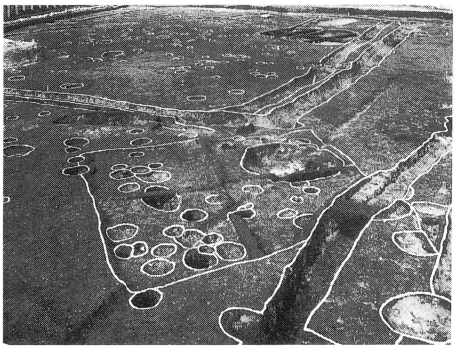
Ⅲ期　溝状遺構８条、土坑多数を検出した。SD01は、幅4.0m、深さ1.8m、断面逆台形を呈する屋敷地の堀を思わせる大溝で、埋土上面からは多数の縄文時代石器類を含む礫群に混じって、近世陶器・陶磁器類、土師質の皿、中世の灰釉系陶器が検出された。下面は遺物が少なく灰釉系陶器が少量出土した。

C区

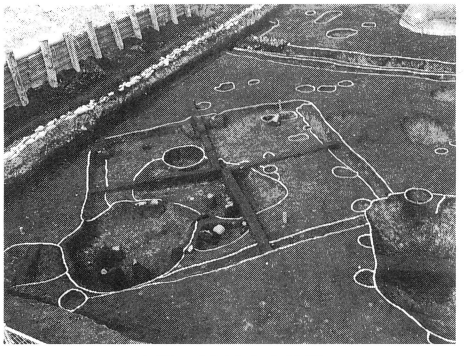
I期　土器棺墓2基を検出した。馬見塚・樫王期のものである。

II期　竪穴住居3軒、溝状遺構1条を検出した。竪穴住居は、1辺6mほどの隅丸方形で、主軸はほぼ北を向いている。北壁中央部にカマド跡の残るもの（SB01・02）と破壊され焼土だけ検出したもの（SB03）がある。床面は、後世の攪乱を受けて残りが悪い。出土遺物には、須恵器の蓋杯・高杯・長頸壺・甕・土師器の甕・壺・甑等がある。出土遺物から、3軒とも7世紀代の竪穴住居と思われる。

III期　掘立柱建物3棟、溝状遺構15状、土坑多数を検出した。掘立柱建物は、2間×3間、4間×5間の大きさである。南にある1棟は、調査区外にのびるため大きさは不明である。溝状遺構は、A・B区と同じく2本1セットになって一定の方向を指向している。掘立柱建物を囲う形で“コ”字形にめぐる溝があるが、建物の軸と方向にずれがあるため同時期のものとは思えない。SK90は、径1mほどの円形の土坑で、A区と同様、礫群に混じって灰釉系陶器椀・皿・片口鉢が40個体以上検出された。



C区　SB02出土状況



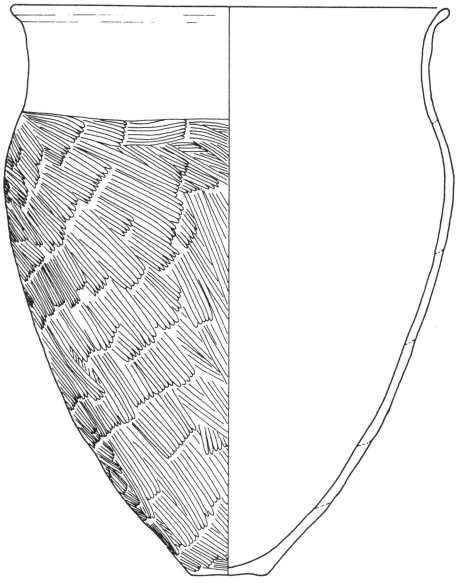
C区　SB03出土状況



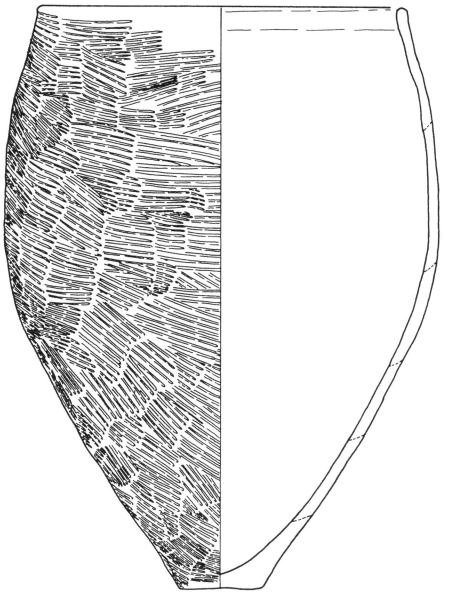
C区　SK90遺物出土状態

まとめ　今回の調査で、古墳時代後期の遺構が新たに検出され、遅くとも7世紀代には居住域として存在したことが確認された。また、麻生田大橋遺跡では、約250基の土器棺墓が検出されている。遺跡の状態を考えれば、さらに多くが存在したのは確実である。縄文から弥生への移行の時期にもかかわらず、この遺跡では土器棺墓という墓制を頑なまでに守り続け、弥生時代中期に初めて方形周溝墓を取り入れるのである。今後、この土器棺墓のあり方を詳細に検討することにより、東三河地方の縄文時代から弥生時代への移行の過程の一端が明らかになると思われる。

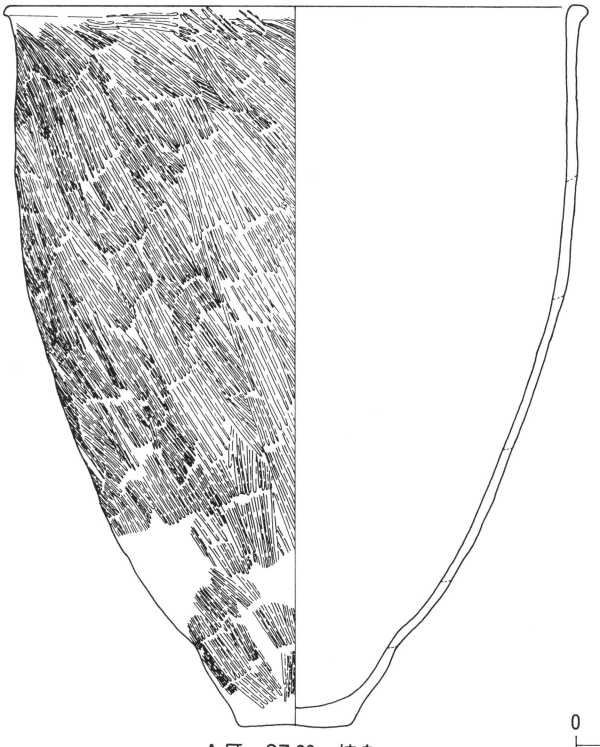
（安井俊則）



A区　SU 37　棺身



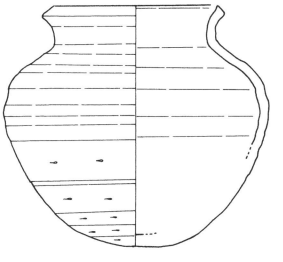
A区　SZ 40　棺身



A区　SZ 30　棺身



C区　SB 01



A区　SD 13



第4図　出土遺物（1／5）

東海北陸自動車道関係埋蔵文化財調査について

東海北陸自動車道（一宮市～木曽川町間）予定地内における埋蔵文化財包蔵地は、分布調査の結果に基づき16遺跡が所在していることが判明した。その内、田所遺跡・西上免遺跡・毛受遺跡・八王子遺跡以外の遺跡については、遺跡の性格・層位・その拡がり等の試掘調査を実施する必要がある。

本年度は（仮称）光明寺Ａ遺跡において３ヶ所の調査区を設定したが、木曽川氾濫原であり、砂層の堆積が著しく明確な遺構を確認することができえなかった。

東海北陸自動車関係埋蔵文化財包蔵地一覧

番号	遺跡名	所在地	概況	備考
1	(仮称)光明寺Ａ	一宮市光明寺	中世遺物散布地	
2	(仮称)光明寺Ｂ	一宮市光明寺字出来野・権現塚	中世遺物散布地	
3	(仮称)田所Ａ	一宮市田所字戌亥出・宮前	中・近世遺物散布地	
4	田所遺跡	一宮市田所字戌亥出	平安～室町時代遺物散布地	
5	(仮称)大毛	一宮市大毛字白山東，田所字白山	古墳～中世遺物散布地	
6	(仮称)門間Ａ	葉栗郡木曽川町黒田字南一本松	中世遺物散布地	
7	(仮称)福塚	葉栗郡木曽川町黒田五ノ通り字広場	古代～中世遺物散布地	
8	(仮称)馬寄	一宮市今伊勢町馬寄字上沼	中・近世遺物散布地	
9	西上免遺跡	尾西市開明字西上免	弥生～鎌倉時代遺物散布地	遺跡番号 07001
10	(仮称)西上免南	尾西市開明字下上免・東新規道	中・近世遺物散布地	
11	(仮称)開明Ａ	尾西市開明字苅安賀通	中・近世遺物散布地	
12	(仮称)馬引	一宮市大和町馬引字郷裏・郷丑寅	中世遺物散布地	
13	毛受遺跡	一宮市大和町毛受字城之腰	鎌倉・室町時代遺物散布地	毛受城跡
14	八王子遺跡	一宮市大和町苅安賀字比出	弥生時代遺物散布地	遺跡番号 02068
15	(仮称)大和町Ａ	一宮市大和町苅安賀字火口上・川田	弥生～中世遺物散布地	
16	(仮称)林野	一宮市大和町北高井字千東・小円坊他	中世遺物散布地	



笠松町
笠田町
松倉町
北山町
渡町
松原町
川島町
河田町
光明寺
極楽寺
笹野
大野
サイクリング道路
木曽川町
羽島市
北方町
葉栗
宮
浅井町
大日比野
大毛
高田
門間
福塚
馬寄
富塚
江森
佐千原
西島
時之島
今伊勢町
本神戸
長島町
松山町
新神戸
開明
小原
新田
宮新田
将監
高野島
中島
小信
一ッ屋
尾西市
三条
籠屋
馬引
板倉
福森
東五城
大平
花井方
北今
西萩原
富田方
朝宮
萩原
二子
林野
大和町
河田方
萩原町
東宮重
北高井
戸塚
於保
妙興寺
多加木
猿海道
丹陽町
外崎
森本
大西
馬見塚
浅野
下浅野
宮地
花池
殿町
城崎通
北園通
大江
本町
新生
住吉
末広
神山
音羽
大宮
桜
浜町
朝日
富士
泉
緑
印田町
赤見
西成
北小渕
柚木颪
西大海道
若年
小赤見
大赤見
丹羽
浅井町
瀬
河端
西海戸
中島
江森
島村
車屋敷
杉山
尾関
河野
小日比野
名鉄尾西線
日本毛織
苅安賀
下水処理場
赤池町
東海道本線
吾鬘
三ッ井
大日
下渡
泉屋
宝江
長池
松枝
藤掛
玉井
外割田
黒田
曽根
狐塚
更屋敷
田所
八幡
中和羊
吉田
野府
後
奥町
向神田
郷中江
若宮地
薬師寺
無動寺
岐南町飛地
競馬場
新木曽川大橋
木曽川橋
下中屋敷

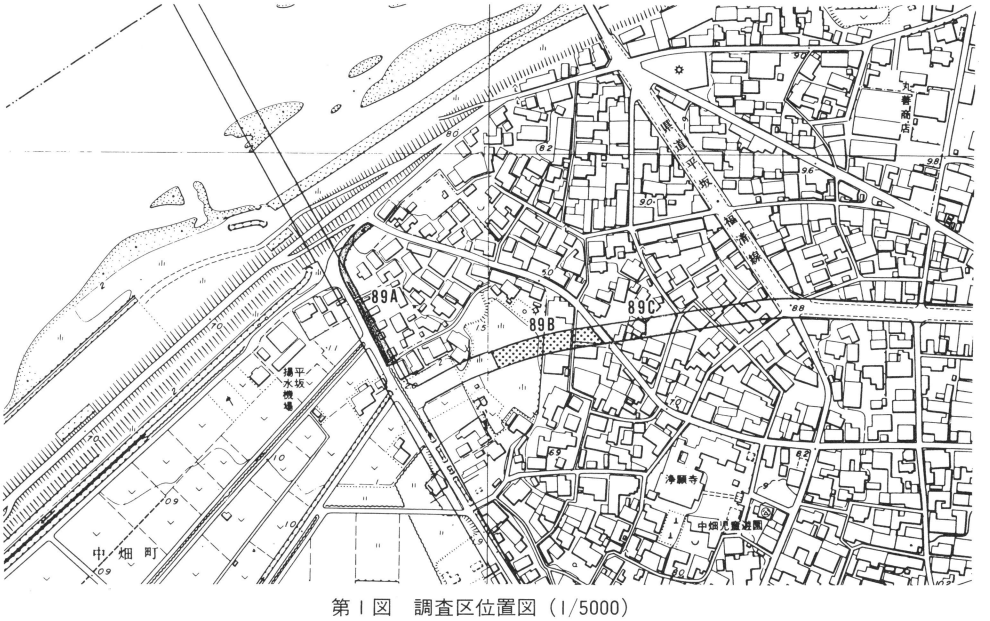
清水（しみず）遺跡

清水遺跡は、三河平野南部に位置する西尾市の西縁の矢作川左岸に位置し、碧海台地縁辺が東西方向から、南北方向に変化する地点の洪積台地の縁、及び沖積地に立地する。調査区は、A～Cの3区に分れ、A区とB区の西半は沖積地、B区の東半とC区は洪積台地上にあり、各々標高約2mと約5mを測る。

A区の北西端は洪積台地にかかり、この端部で平安時代後半の溝1条を検出し、これに接する沖積層内の古墳時代の包含層より製塩土器が出土した。また、海抜約1mから0mの間の旧汀線の砂層の包含層中より、平安時代前半の製塩土器が多量に検出された。B区中央部の洪積台地に接する沖積砂層の上部より、縄文土器前期の清水ノ上式土器及び、これに伴う石器が検出された。C区では、中世末から近世初期の大形の土坑群が検出された。遺構の性格は、貝殻の廃棄土坑と土取り土坑の2種類があり、出土遺物は内耳鍋がほとんどを占める。（酒井俊彦）



C区全景（西より）



第1図　調査区位置図（1/5000）